

多賀城市文化財調査報告書 第37集

高崎遺跡

—第11次調査報告書—

平成7年3月

多賀城市教育委員会

昭和46年緊急調査における土器出土状況

(宮城県多賀城跡調査研究所提供)

高崎遺跡

— 第11次調査報告書 —



序 文

本書で報告する多賀城市高崎二丁目所在遺跡において初めて発掘調査が行われたのは昭和46年のことであります。耕作中、偶然多量の土器が出土したことに端を発した緊急調査でしたが、出土した土器は平箱47個分にもおよぶ膨大なもので、今村氏邸内遺跡として断界の注目されるところとなったのであります。その後の検討で、それらは万燈会のような仏教の儀式で使用された灯明皿と考えられるようになり、かつてこの多賀城においてもそのような儀式が厳かに執り行われたことを示す貴重な遺跡として位置付けられております。以来24年の時を経て再び発掘調査を実施したところ、まだ多くの灯明皿が捨てられた当時の姿で残っており、かつての調査と同じ感動的な光景を再び見ることができたことは誠に幸運であります。調査終了後の詳細な整理・検討によって一度に1300個もの灯明皿を使用したことが判明しておりますが、そのような多量の灯明皿が一斉に明かりをともしている光景を思い浮かべると感慨深いものがあります。

今回の調査は個人住宅の建設に先立つ緊急調査であり、多くの制約のもとで実施したものであります。関係者各位のご高配を賜り大きな成果を納めることができました。特に、宮城県教育庁文化財保護課、東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所各位には調査から本書の作成に至るまでご指導・助言を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

多賀城市教育委員会

教育長 櫻井茂男

例　　言

1. 本書は平成6年度に国庫補助事業として実施した高崎遺跡第11次調査の成果をまとめたものである。
2. 遺構番号は第1次調査からの一連番号である。
3. 本書中で使用した遺構の分類記号は次のとおりである。

SB	建物	SA	柱列	SI	豎穴住居
SD	溝	SK	土壙	SX	その他

4. 描図中の高さは標高値を示している。
5. 調査区の実測基準線は「平面直角座標系X」を使用し、原点X = -189.520m、Y = 14,420mを通る南北方向の直線を南北基準線、それと直交する東西方方向の直線を東西基準線とした。この原点を0として調査区内に3mの方眼を組み、東西方向は原点から東をE、西をWとして原点から1m離れるごとにアラビア数字でE1・E2・E3…、W1・W2・W3…と表した。南北方向は原点から北をN、南をSとして同様に表した。
6. 方位の北は座標北を示している。
7. 土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1973）を参照した。
8. 発掘調査および本書の作成に際しては、次の方々および機関から指導・助言を賜った（敬称略）。

桑原滋郎 小井川和夫 加藤道男 真山悟 後藤秀一 佐藤則之 古川一明
村田晃一 菅原弘樹 佐藤憲幸（宮城県教育庁文化財保護課）、進藤秋輝 丹羽茂
阿部恵 佐藤和彦 柳沢和明 白崎恵介（宮城県多賀城跡調査研究所）、千葉景一
藤沼邦彦 高野芳宏 阿部博（東北歴史資料館）、平川南（国立歴史民俗博物館）、
古川雅清（創宇舎）、今村勤 渋谷セツ（土地所有者）、高崎地区集会所

9. 本書の執筆は、千葉孝弥、伊藤浩が行い、科学的分析結果について国立歴史民俗博物館情報資料研究部永嶋正春氏より寄稿していただいた。執筆分担はI～V-1、IV-1が千葉、V-2～4、VI-2が伊藤、付章が永嶋である。編集は千葉、伊藤が行い、校正等にあたって滝川ちかこの協力を得た。また、遺物整理、図版作成等の作業を大山真由美、福原弥子、進藤漢子、間根香織、太田久美子、赤坂菜緒子、須藤美智子、黒田啓子、陶山喜美栄、伊藤美恵子、高橋知賀子、下山美香が援けた。
10. 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目 次

I	遺跡の位置と地理的・歴史的環境	1	V	考察	35
II	調査に至る経緯	2		1. 古代	35
III	調査経過	3		(1)遺構の年代	35
IV	層序	7		(2)土器捨て場について	35
V	発見した遺構と遺物	9		(3)石組暗渠とその関連遺構	42
1.	古代	9	2.	中世以降	43
(1)	地山面検出の遺構	9		付章 高崎遺跡出土澄明皿内の 残存物について	63
(2)	第Vb層・第VI層上面検出の遺構	9			
(3)	第1次整地層上面検出の遺構	9			
(4)	東区地山面検出の遺構	13			
(5)	土器捨て場跡	17			
2.	中世以降	30			
3.	年代不明の遺構	32			
4.	遺構外出土の遺物	34			

調 査 要 項

1. 遺 跡 名	高崎遺跡（宮城県遺跡登録番号 18018）		
2. 所 在 地	宮城県多賀城市高崎二丁目62番地		
3. 調査面積	176m ² （対象面積 552.12m ² ）		
4. 調査期間	平成6年4月11日～6月13日		
5. 調査主体	多賀城市教育委員会	教育長	櫻井 茂男
6. 調査担当	多賀城市埋蔵文化財調査センター	所長	鳥山 文夫
		調査員	千葉 季弥
			伊藤 浩
7. 調査参加者	奥田 陸男・小野 玉乃・小野寺恵子・加藤 昭一・菅野 文夫 小松 まり・斎藤ゆき子・境 幸子・武山あや子・南城美岐子 松本 寧一・星 光治・星 秀雄・渡辺美智子		

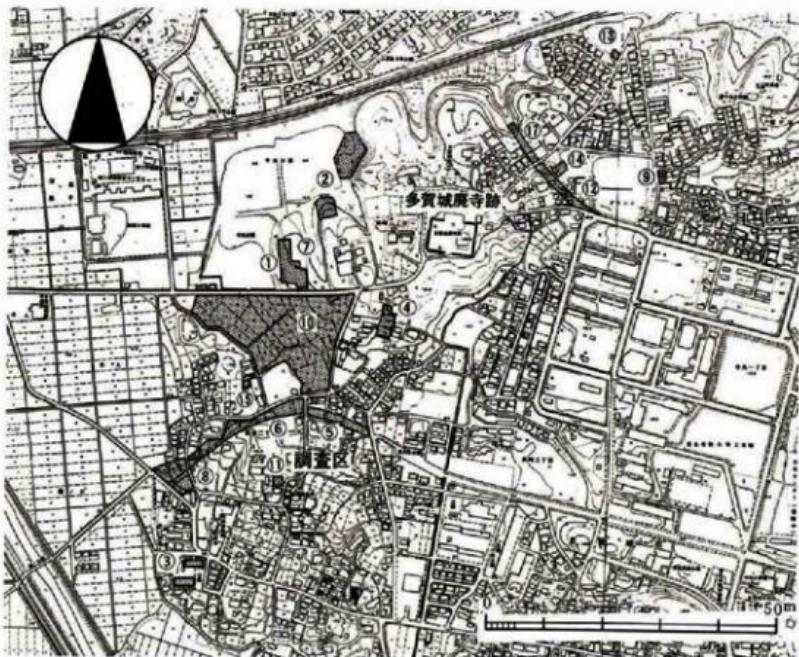


I 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

遺跡の位置：多賀城市は、宮城県のほぼ中央部に所在し、仙台市の市街地から北東約10kmの地点に位置している。東西約8.5km、南北約3.5kmの広さがあり、南西部で仙台市、北西部で利府町、北東部で塩釜市、南東部で七ヶ浜町とそれぞれ接している。本遺跡はその多賀城市のほぼ中心部に所在している。

地理的環境：本市の地形は、市内のほぼ中央を南北に流れる砂押川を境として、東側が丘陵地、西側が沖積地と大きく二分されている。地理学的には、丘陵地は松島丘陵からのびる段丘陵の内の塩釜丘陵と呼ばれるものであり、沖積地は広義の仙台平野である。本遺跡は、一部低湿地も含んでいるが、大部分は沖積地に向かって枝状に発達した緩やかな丘陵上に位置している。調査区周辺は標高約16m未満であり、狭い平坦面や谷状のくぼみが見られるなど、緩やかながら起伏に富んだ地形となっている。

歴史的環境：本遺跡は古墳時代から江戸時代にかけての複合遺跡であり、周辺には特別史跡多賀城跡の一部である多賀城廃寺をはじめとしていくつかの遺跡が近接して存在している。多



第1図 高崎遺跡調査区位置図

賀城廃寺は本調査区の北東約0.5kmの地点にあり、奈良時代から平安時代にかけて存在した多賀城の付属寺院である。同時代の遺構は本遺跡の各地点から発見されており、第1・7次調査では奈良時代までさかのぼる可能性のある大規模な掘立柱建物跡や平安時代の合口壺棺、第5・6次調査でも平安時代の竪穴住居跡や合口壺棺などを発見している。第10次調査は多賀城廃寺西側の丘陵西斜面一帯の広い範囲を対象とし、80棟近い竪穴住居跡や南北に長い掘立柱建物跡など数多くの遺構を発見している。灰釉陶器大型手付瓶やミニチュアの長頸瓶、鉄製匙などがまとまって出土した竪穴住居跡があり、付近から仏器である灰釉陶器の淨瓶なども出土していることから一般庶民の集落とは異なるものであろう。古墳時代の遺跡はまだあまり知られていないが、多賀城廃寺の調査の際に前期の竪穴住居跡が3棟発見されている。また、近世の遺構としては第7次調査で江戸時代の屋敷跡を発見している。

II 調査に至る経緯

今回の調査の対象となった地点は昭和46年に宮城県多賀城跡調査研究所によって調査が行われている。庭を耕作中に偶然土器が発見されたことから緊急調査を実施したものであるが、わずか10平方メートルに満たない面積から多量の土器が出土している。その概要を『多賀城市史4考古資料』から引用すると次のとおりである（註1）。

- 1 一つの土壠から平箱47個分の土器が一括して出土した。土壠を完掘していないため、この土壠中の土器は大幅にこの量を上回るものと推定される。
- 2 土器の種類と量的関係は、須恵系土器が6割弱、土師器が4割弱、須恵器が0.5割、綠釉陶器が1点のみである。
- 3 完形ないし図上復元できる土器は640点程になる。破片資料は14箱分あるが、接合作業における時間的制約などの限界を考えれば、本来はすべて完形のものであったとみて良いと思われる。
- 4 緑釉陶器の1点を除けばすべて杯類であること、およびその内面には共通する付着物がみられる場合が非常に多いことから、これらは特殊な用途に用いられたものと考えられる。
- 5 年代は10世紀前半と考えられる。

以上の1～5から導き出せることは、10世紀前半の時期に640点を超す大量の杯類がある特定の役割を担って同時に用いられ、使用後に破損を待つことなく一括して廃棄されたということである。この点から一般集落における土器使用のパターンとはまったくかけ離れた状況であることが確認される。

特定の役割については、土器の内面を中心とする付着物がキーとなる。この科学的分析が行

われていないために断言はできないが、灯明皿の油煙痕跡のように思われる。とすれば、640個、恐らく1000個を超すであろう杯が一齊に灯明皿として使われたことになり、灯明を多量に使う特別な儀式—例えは「万燈会まんとうえ」—に用いられ、儀式の後に廃棄されたものと考えられる。

以上のように、緊急調査でもあり、調査面積もわずかであったことから、当地点においてはまだかなりの土器が埋没していることが推定されるものの、遺構に関する情報はほとんど無いに等しい状況であった。

平成5年11月1日、多賀城市高崎二丁目9-36の渋谷篭から同62番地の一部において住宅新築工事を行いたい旨の協議が出された。工事計画書によれば、住宅は現地表から44cm盛り土して建設するため、多賀城市教育委員会文化財係では遺跡におよぼす影響が軽微であると考え、立会い調査で対処する旨を県文化財保護課に届けた。これに対し、県文化財保護課では、建築予定地からかつて多量の土器が発見されており、その性格等について未だ判然としていない点が多いことから確認調査が必要であると回答した。この指導に従い、市文化財係と埋蔵文化財調査センターとで発掘調査に係る協議を行った結果、当該地は古代多賀城の周辺地域を解明する上で重要な遺跡であることから発掘調査を行う方向で検討し、個人住宅であることから平成6年度の国庫補助事業として実施することに決定した。なお、調査方法については、盛り土を行う部分については確認調査とするが、北側の丘陵上部については切り土するため事前調査とすることにした。

III 調査経過

今回の調査は、前述したとおり北側の一部は事前調査、その他は確認調査として開始した。ところが、立会い調査から確認調査へ方法を変更する原因となった土器集中地点の様子が明らかになるにつれ、それらは調査区南半部の広い範囲にわたるものであり、そのうちの西半分は確実に住居建設予定地にかかることが判明した。しかも、浅い部分では現地表面からわずか10数cm下に存在することから、住宅建設の際に厚く盛り土を行うにしても、工事による地下への影響が憂慮され、さらに将来庭として使用される部分も、庭木の移植等によって現状のまでの保存は困難であると判断した。そのため、文化財係および地権者と協議したところ、土器集中地点については、出土状況等の記録をとった後すべての土器を取り上げることとした。これら土器集中地点に対する調査方法の変更に伴い、その上層の中世の遺構は必然的に多くの部分を掘り上げることとなった。また、土器集中地点より下層で発見した遺構については確認調査を行うにとどめた。なお、調査区には重機の搬入口がないため調査はすべて人力で行った。

調査経過については以下のとおりである。

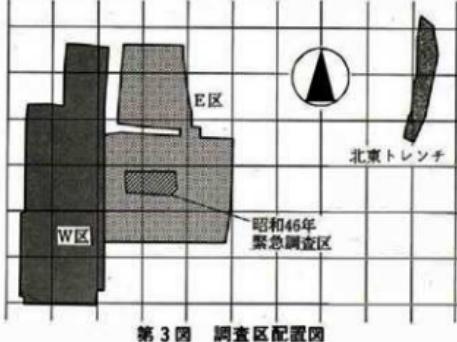
4.11 調査開始。西区から表土剝離開始。現代の盛り土等を除去。4.12 西区中央部において東西に延びる大溝跡（S D 1086）を発見。規模や堆積土の状況把握のため一部を断割る（～15）。

この溝跡の北側で土器の細片や炭化物を含む土壤状の落ち込みを1基発見。また、南側でも6～7個重なったままの状態で埋まっている土器を発見（後

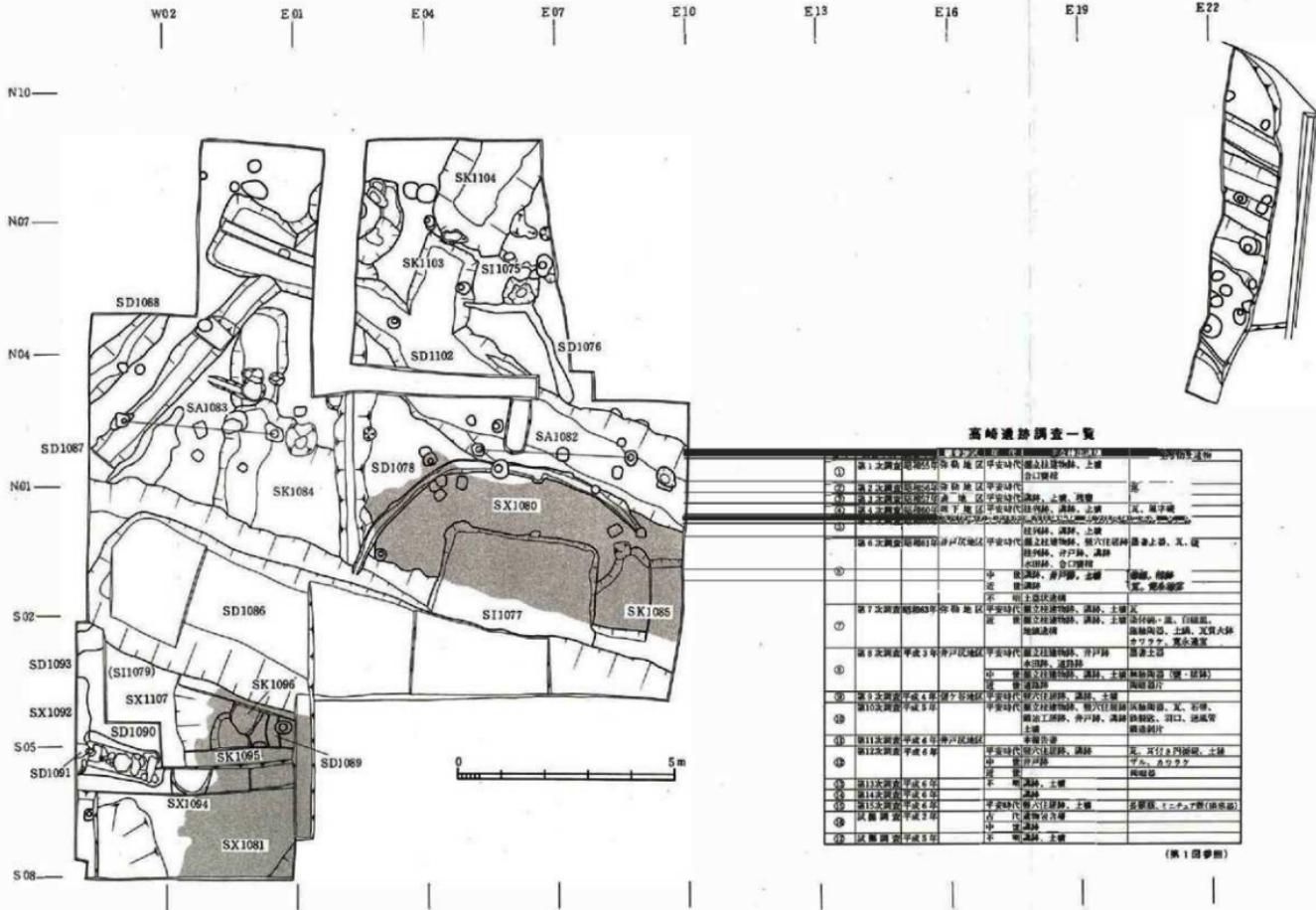
にS X 1081と判明）。4.13 東区の表土剝離開始。4.14 東区において宮城県多賀城跡調査研究所による緊急調査（昭和46年）のトレンチの一部を発見。S D 1086の底面付近から下駄、漆器皿などが出土し、中世の遺構と判明。4.15 東区の北端部でS D 1102東西溝跡、南半部においてS D 1086の続きを検出。4.18 S D 1102の堆積土掘り上げ後、その底面からS A 1082や抜き取り穴を伴った柱穴など発見。調査区東端部でS D 1086の北壁に構脚とみられる柱穴を発見したため東区の南端部を拡張。4.19 研究所トレンチの範囲を確認。遺構実測のため、測量基準点から測量原点移動。4.20 研究所トレンチ内の埋め土を除去し、壁面を清掃。多量の土器が重なり合って埋没している状況を確認。西区北端部を拡張。西区北半部は地山まですべて近代以降の盛り土と判明。3m方眼に測量基準線を設定。4.21 西区において調査の終了したものから平面図作成開始。東区を北側に拡張。4.22 東区北側の拡張区で発見した遺構の堆積土掘り上げ。4.25 S D 1086を中心とした上層遺構の写真撮影。東区東壁の土層断面図作成。4.27 S K 1084の調査開始。十文字に土層観察用畦を残し堆積土を掘り下げる（～5.19）。4.28 S X 1080の調査開始。十文字に土層観察用畦を残し堆積土を掘り下げる（～5.20）。4.29～5.8 国民の祝日等のため作業休み。5.10 S X 1080については土器の出土状況が現時点で最も良好に観察できるため、調査途中ではあるが報道機関を通じて市民に公開した。S X 1081の南端部にトレンチを設定。5.11 S X 1081南端のトレンチにおいて



第2図 調査開始前の状況（南より）



第3図 調査区配置図



第4図 遺構全体図

その下層で石組みの暗渠を発見。S X1080の堆積土中に10世紀前半降下の灰白色火山灰の存在を確認。5.12 東区北部発見のS I 1072の調査(~5.16)。5.13 S X1081の堆積土最下層に灰白色火山灰ブロックを検出。5.18 S X1080第1層中の土器のまとまりを写真撮影。5.25 S X1080第2層の下に灰白色火山灰の自然堆積層を発見。また、その下層において岩盤上から掘り込んだ竪穴住居跡、土壤を検出。5.31 調査区東端部に南北トレンチを設定。6.1 整地層の精査開始。北東トレンチの調査開始。表土剥離を行い、岩盤上まで後世の削平を受けていることを確認。6.2 北東トレンチで柱穴数基発見。数cm掘り下げて写真撮影。6.6 北東トレンチに測量原点移動。実測基準線を設定し平面図作成。6.7 S I 1077、S D 1078の堆積土除去。6.10 S I 1077、S D 1078の平面図作成。並過ぎ、集中豪雨のためしばらく作業中断。6.13 石組み暗渠周辺の平面図、断面図作成。器材等を撤収し、発掘調査終了。



第5図 北東トレンチ(北より)

IV 層序

調査区は、低丘陵の南斜面に位置しており、大部分が12度前後の緩斜面となっている。この斜面には、調査区中央部に南北方向の浅い谷があり、10世紀前半の土器捨て場として使用されたことから堆積層は多量の土器を含む包含層となっている。この包含層の下は、東区では岩盤となっているが、西区では2時期の整地層や堆積層を確認している。以下、西区の層序を中心とし説明する(第6図)。

第Ⅰ層 表土。現代の宅地に伴う盛り土と畑の耕作土に細分できるが一括して扱う。調査区全体に認められる。前者からは近・現代の陶磁器が出土している。

第Ⅱ層 西区南西端部にのみ堆積している褐色砂質土である。中世の大溝跡はこの上面から掘り込んでいる。

第Ⅲ層 S X1081 多量の土器を含む包含層である。3層に細分され、第3層上面に多量の灯明皿が一括廃棄されている。また第3層中に10世紀前半頃降下した灰白色火山灰の小ブロックを含んでいる。S X1081については次の項で詳しく説明する。

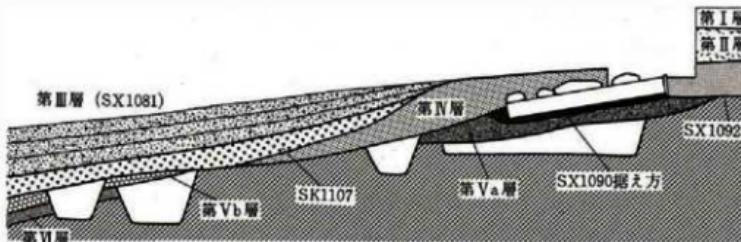
第IV層 第2次整地層 西区南半部で発見した整地層である。岩盤の小粒を含む黄褐色土を用い、丁寧に整地している。地盤が平坦な調査区南側壁付近ではほぼ水平に土を積んだ状況が観察できる。土器片や炭化物などはほとんど含まない。厚さは25~10cmである。多賀城創建期の瓦が出土した遺構を直接覆っていることから年代は8世紀前半以前である。

第Va層 第1次整地層 西区南半部のうちさらに西側で発見した整地層である。岩盤の小粒や炭化物を含む黄褐色土を西側から東側へ斜めに積んでいる。厚さは15cm以上である。本層上面で検出した遺構から多賀城創建期の瓦が出土していることから年代は8世紀前半以前である。

第Vb層 西区南半部のうち東側に堆積している褐色土である。第2次整地層と直接の重なりはないがSX1094やSK1095を介在させることによって第2次整地層より古い段階のものであることが明らかである。第1次整地層との関係は不明であるが第7図D-D'の断面観察によると両者の上面レベルはほぼ一致している。本層の上面で小柱穴、溝、土壌を発見している。厚さは22~10cmである。年代は不明である。

第VI層 第Vb層 とほぼ同じ範囲に堆積している褐色土である。岩盤の上に直接堆積しており、その漸移層かと考えられる。本層の上面で溝を1条発見している。厚さは15~10cmである。

また、東区北端部のわずかな平坦面には、暗褐色砂質土や褐色砂質土が堆積しておりそれぞれの上面で土壌や溝跡を発見している。9世紀頃の竪穴住居を覆っていることから年代的にはそれ以降のものであるが、詳しい年代については不明である。



第6図 層序模式図

V 発見した遺構と遺物

1. 古代

古代の遺構としては竪穴住居3、石組暗渠1、糞1、不明落ち込み1、土器廃棄遺構2などのほかいくつかの土壙や溝があり、さらに2時期の整地層を発見している。以下、検出面ごとに主な遺構とその出土遺物について概要を述べる。

(1) 地山面検出の遺構

SI 1079竪穴住居跡（第7図、図版7）

SI 1079は西区南半部で発見した住居跡である。SD 1086によって露出した断面の調査にとどめたため平面的な調査は行っておらず、詳細は不明である。地山面から掘り込んでおり、第1次整地層によって完全に覆われている。残存状況が良好な調査区西壁付近でみると深さは0.45mである。調査区西壁際のトレンチに現れず、東側についてもSK 1096掘り上げ後の地山面では検出できなかったことから平面形や規模については不明である。床面は地山を平坦に削り出したままであり、貼り床は認められない。東側にわずかに傾斜している。西側の壁は緩やかに立ち上がっており、その下には幅0.20m、深さ0.10mの周溝がある。堆積土は5層に大別することが可能であり、周溝および床面上直に堆積している最下層には焼土や炭化物が多く含まれている。遺物は出土していない。

(2) 第Vb層・第VI層上面検出の遺構（第7図）

SD 1106溝跡

SD 1106は東区南半部で発見した南北溝跡である。SD 1086によって露出した断面およびその南方のトレンチによって確認した。平面的には西壁の一部を検出したにすぎない。第VI層の上面から掘り込んでおり、第Vb層によって覆われている。規模は、上幅0.5m以上、深さ0.30mである。わずか2.4m検出したのみであるが、方向は北で5度西に偏している。底面は地山に沿って傾斜しており、比高差は約0.1mである。

SK 1095土壙

SK 1095は東区南半部で発見した土壙である。第Vb層から掘り込んでおり、第2次整地層に覆われるSK 1094より新しいことを確認している。SD 1105より新しいが、SK 1096とSX 1107より古い。平面形は南北に長い塔円形と考えられ、規模は長径2m以上、短径0.95m、深さ0.30mである。

(3) 第1次整地層上面検出の遺構（第7図、図版6・7）

SD 1090石組暗渠跡

SD 1090は西区南半部で発見した石組暗渠跡である。第1次整地層上面に敷設されており、

第2次整地層によって覆われている。構築方法についてみると、はじめに周辺一帯を整地し（第1次整地層）、次に側石設置のための据え方を掘り、側石設置後据え方を埋め戻すという工程である。以下、工程順に説明する。

①整地：本体設置予定地造成のため、S03ライン付近から南側に整地を行う。岩盤小粒や炭化物を含む黄褐色土を北側から南側へ斜めに積んでいる。基底面まで掘り下げていないので規模は不明である。

②据え方：幅1.00～0.85m、長さ1.80mの据え方を掘る。掘り下げていないため深さは不明であるが西壁はほぼ垂直に掘り込まれている状況を確認した。

③側石の敷設：石組暗渠の本体は側石と蓋石によって構成されており、底石は認められなかつた。側石は、断面が方形の細長い切り石をそれぞれ使用している。ただし、北側のものについては素材がやや短い分東端に別の石を据えて補っている。北側のものが一辺約17cm、長115cm以上130cm未満であり、南側のものが一辺約20cm、長さ170cmである。材質はいずれも砂岩である。なお、蓋石は4個確認した。形状と石材は一様でなく、砂岩の切り石、安山岩や凝灰岩の自然石、須恵器甕の破片（第9図1）などが使用されている。溝内部に縦に落ち込んでいた平瓦の破片（第9図3）も蓋の一部であった可能性が高い。蓋石は溝を完全に覆っておらず、多くの隙間がみられる。

④据え方の埋め戻し：側石のほぼ上端まで埋め戻している。蓋石は露出したままの状態だったと考えられる（註2）。

本溝跡の規模は南側の側石の長さを参考にすると1.7m、水道は幅17cm、深さは側石の高さから推定して約17cmである。方向は東で約14度南に偏している。傾斜角度は3度で西側から東側に排水するように敷設されている。

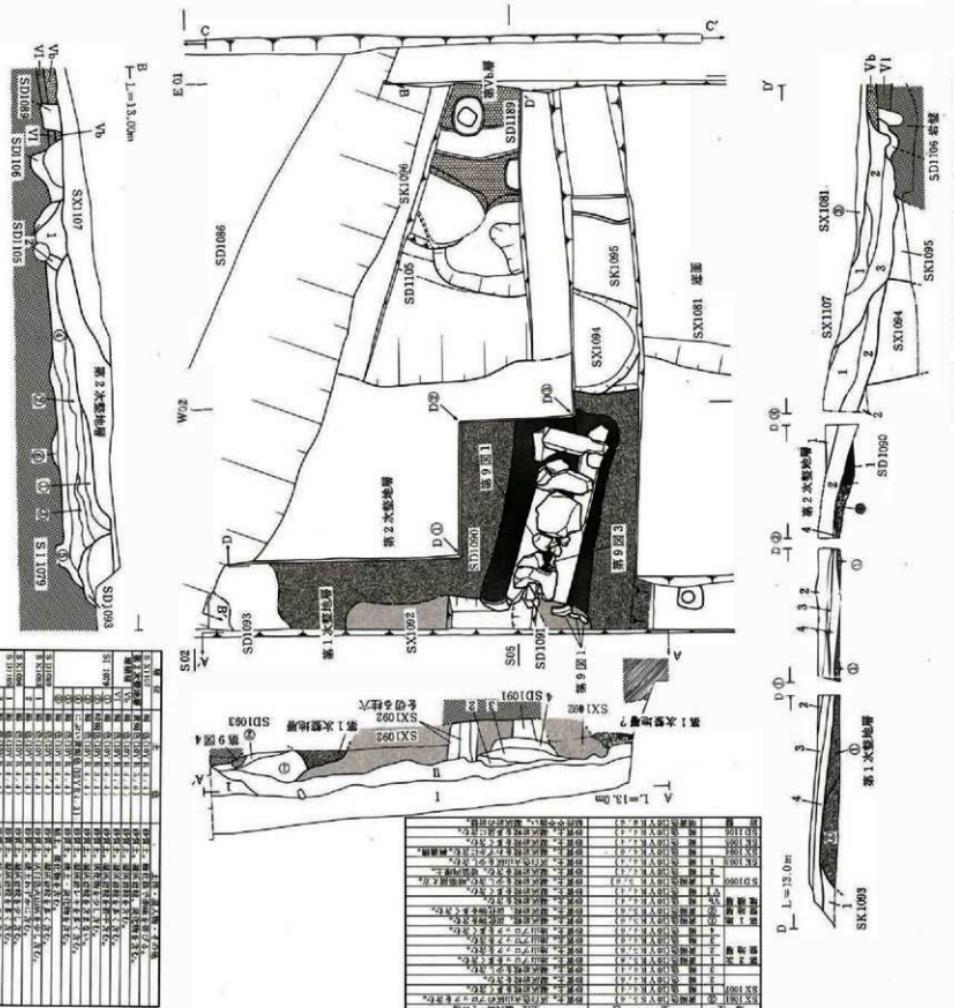
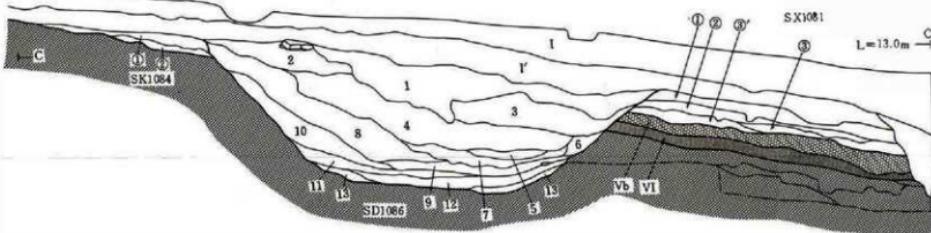
S D1091 溝跡

S D1091はS X1092堆積土上面で発見した素掘りの東西溝跡である。東端部はS D1090の取水口に続いており、同時期に機能していた遺構として捉えることができる。わずか0.3m検出したのみであり、大部分は調査区外へ延びていると考えられる。本溝跡の断面の形状は、調査区西壁の断面を参考にすると、ほぼ中間に段がついており、上半分は緩やかに広がっているが、下半分はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。護岸施設は検出できなかった。規模は上幅約0.8m、下幅0.30～0.21m、深さ0.41mである。下半分についてみるとS D1090取水口との取り付き部分が狭くなっている。遺物は出土していない。

S X1092 落ち込み

S X1092はS D1090の取水口に取り付く落ち込みである。調査区西壁際の第1次整地層上面で発見した。平面形は隅丸方形かと考えられ、規模は南北約2.9m、東西0.3m以上、深さ0.

層 級	土 色	土性・高人物・その他
S X 10B	① 増殖褐色(10 YR 6, 5) ② に似る褐色(10 YR 5, 3) ③ に似る褐色(10 YR 6, 3) ④ に似る褐色(10 YR 5, 4)	砂質土・土器底・植物根を少し含む。 砂質土・粘土物を含む。 砂質土・从白色灰黑色のブロッケを含む。 砂質土・土器底を多く含む。
電 磁 極	黄褐色(10 YR 5, 6)	砂質土・從 1 m 間隔の白色粘土を含む。
V T	土色(10 YR 4, 4)	砂質土・多くの粘土・角巣を含む。



54 mである。S D1090据え方の西端部を切って掘り込んでいるが、本造構の東辺がS D1090の側石と接するように掘り込まれていること、また壁面に現われたS D1090据え方の断面に瓦と須恵器の破片を用いて護岸していることなどから両者は同時に機能していた時期があると考えられ、切り合い関係は工程差と理解しておきたい。第1次整地層を掘り込んでいるSK 1093と重複しており、それより新しい。堆積土は明黄褐色砂質土で硬く緒まっており、底面に近い部分はややグライ化している。護岸施設についてみると、北側の瓦はS D1090据え方の断面に密着しているが、南側の須恵器は壁面からやや離れた状態である。このことは本造構が開口した状態で機能していたことを示唆するものであろう。

遺物は土師器甕、須恵器蓋（第9図2）がそれぞれ1点出土している。土師器甕は底部の破片資料である。全体的に二次焼成を受けてもろくなっている。器面調整等は不明である。須恵器蓋はリング状のつまみをもつものである。体部外面は回転ヘラケズリ調整しており、沈線による圈線がめぐっている。

S X1094構

S X1094はS D1090の排水口（南側石東端）から0.25 m東側に位置する素掘りの井戸状造構である。第1次整地層上面から掘り込んでおり、第2次整地層によって覆われている。平面形はおよそ円形とみられ、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。規模は推定で直径約0.9 m、深さは0.5 m掘り下がったのみであり不明である。堆積土はしまりのない灰黄褐色砂質土である。南側に約12cmの段がある。石組暗渠からの排水をこの構で受け、その後南側の低い部分に排出するための施設かと考えられるが詳細は不明である。遺物は出土していない。

S D1093溝跡

S D1093は東区南半部の西壁際で発見した東西溝跡である。S X1092より古く、第2次整地層によって覆われている。規模は調査区西壁の断面によれば幅0.9 m以上、深さ0.33 mである。方向は東で約20度北に偏している。遺物は平瓦の破片が1点出土している（第9図4）。多賀城創建期（8世紀前半）のものである。

(4) 東区地山面検出の遺構

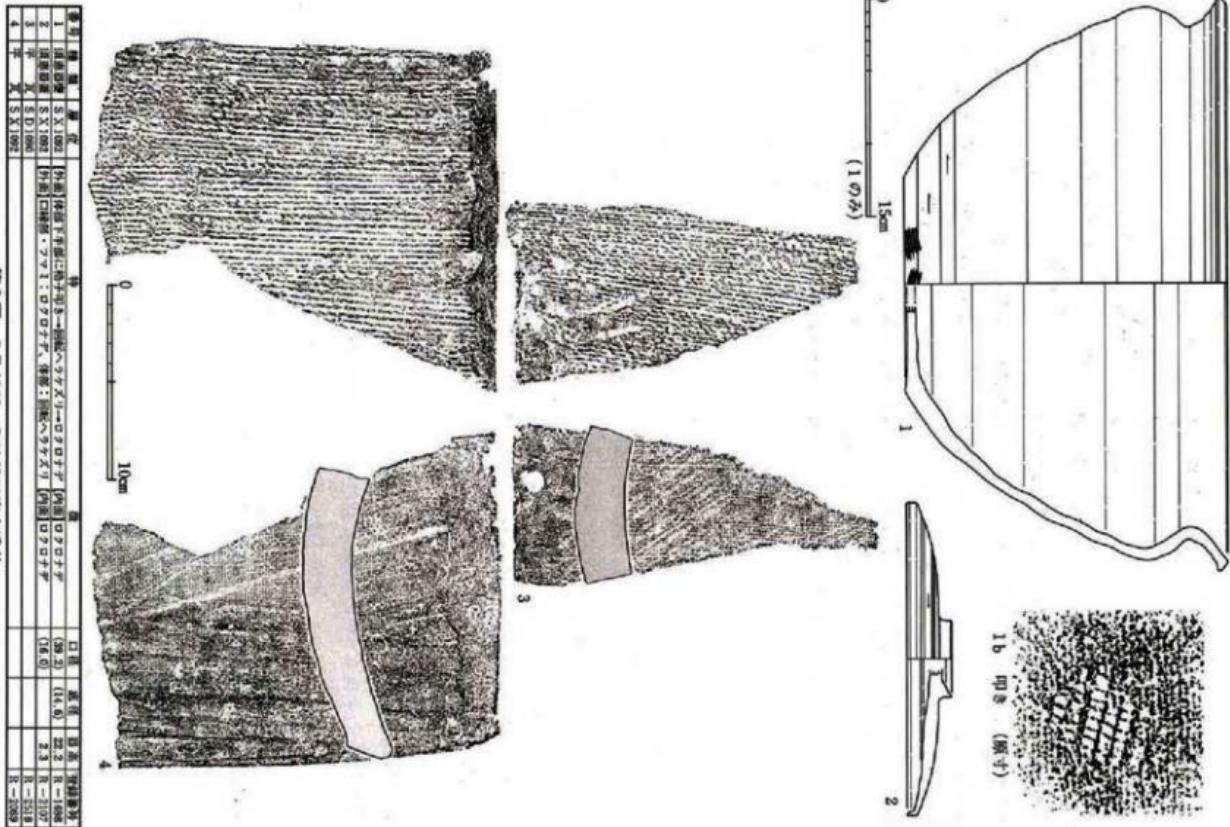
S I 1077堅穴住居跡・S D1078外周溝跡（第10図、図版8）

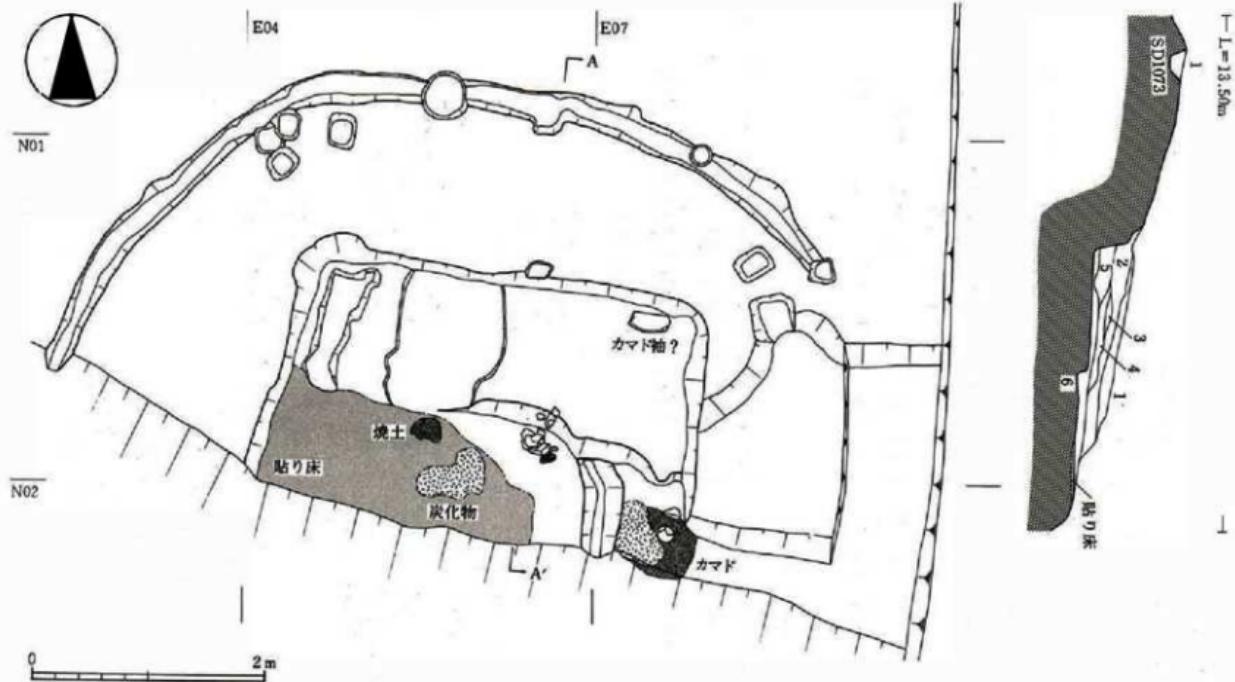
S I 1077は東区南半部で発見した外周溝を持つ住居跡である。S X1080第5層に覆われており、地山面から掘り込んでいることを確認している。S D1086によって南側が大きく破壊されているが、その他の部分は良好に残存していた。東側に位置するSK 1085とも重複しており、それより新しい。平面形は方形であり、南辺が北辺よりやや長い。規模は北辺が3.55 mであり、



第8図 S X1092断面図
(西壁～D①～D②)

第9図 SD 1090・S X 2501 漢子 FRT201 様物





層位	土色	土性・基入物・その他
S 1 1077	1. にかい黄褐色 (10YR 3/4) 2. にかい黄褐色 (10YR 3/3) 3. にかい褐色 (7.5YR 3/2) 4. にかい褐色 (7.5YR 3/3) 5. にかい褐色 (7.5YR 3/4) 6. にかい黄褐色 (10YR 3/4)	砂質土。複数の日光板子を含む。 砂質土。炭化物・焼灰・骨粉を含む。 粘質土。焼灰容積を少し含む。 粘質土。焼灰容積の半分を少し含む。 粘質土。焼灰容積を少し含む。 粘質土。焼灰容積のレトロ反射率73%。
SD 1078	1. 黄褐色 (10YR 4/2)	砂質土。斑状のレトロ反射率33%。

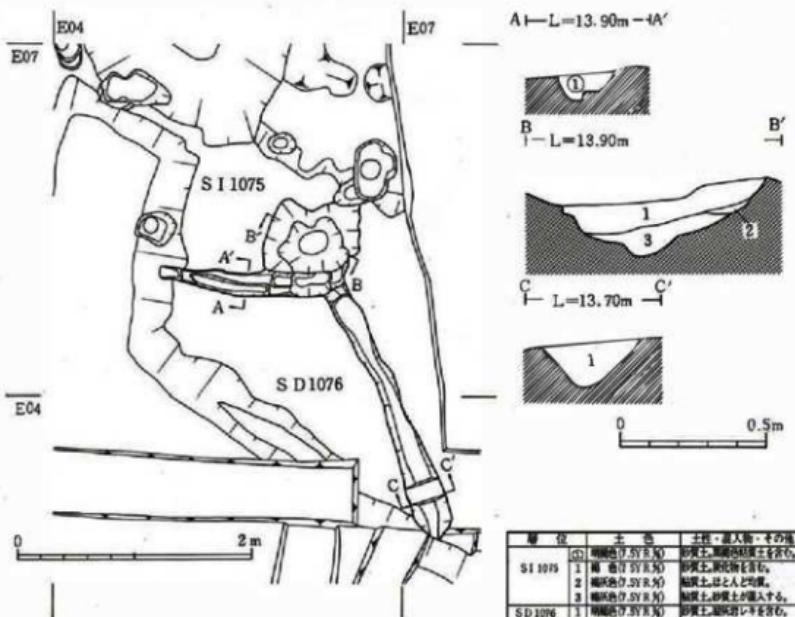
第10図 SI 1077・SD 1078

東辺と西辺はそれぞれ約2mまで検出した。南辺は3.85m以上である。壁高は、北辺で0.40～0.36m、西壁の南端部で0.12mである。カマド本体は残っていなかったが、東辺において、北東隅から約2.2m南の地点に東西0.55m以上、南北0.70mの範囲で焼土面があり、その周辺には炭化物の堆積も認められることから、その部分がカマド本体の設置されていた場所と考えられる。床面は、カマドの前面に低い平坦面があり、その段の西半部に貼床があるが、その他はすべて地山である岩盤を削りだしたままとなっている。カマド前面の平坦面は北壁付近の床面より0.10m低く、焼土面の西側に幅0.34～0.27m、深さ0.03mの南北方向の浅い溝が設けられている。北西隅に南北1.00m、東西0.30mの南北に長い台状の削り出し部分がある。

S I 1108外周溝跡は、S I 1077の北側、すなわち斜面上方にあり、その西辺から北東隅にかけて弧状に延びている。規模は幅0.35～0.20m、深さは最も深い部分で0.21mである。遺物は出土していない。

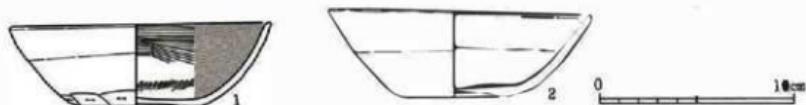
S I 1075竪穴性居跡(第11図、図版8)

S I 1075は東区北半部の地山面で発見した住居跡である。褐色土に覆われているが、同層堆積以前に床面まで既に失われている。また、S K 1103、S D 1102などによっても大きく破壊されており、南辺の周溝の一部と南東隅に接して設けられた土壤、および外延溝S D 1076を



第11図 S I 1075・SD 1076

検出したのみである。南辺の周溝は幅約0.2mであり、残存部分は約1.6mである。南東隅の土壌は周溝の北壁と接しており、長径約1.0m、短径約0.6m深さ約0.2mである。底面からの立ち上がりは緩やかである。外延溝は南東隅からほぼ直線的に延びており、約2.3m検出した。規模は、住居に近い地点では幅0.20~0.15m、深さ0.11m、南端部では幅0.35m、深さ0.15mである。なお、本住居跡の方向は南周溝でみるとおおよそ東西発掘基準線と一致している。遺物は、外延溝の堆積土中から土師器と須恵器の杯が重なった状態でそれぞれ1点、土師器杯の破片資料が1点出土している。土師器杯（第12図1）はロクロ調整の後、体部下端部から底部にかけて手持ちヘラケズリを施している。須恵器（2）は回転糸切り後無調整である。両者とも9世紀頃のものと考えられる。



番号	種類	場所	特徴	寸法	口径	底径	高さ	参考番号
1	土師器杯	外延溝土	[外面] ロクロナゲー体部：子持ちヘラケズリ（模擬物） [底部] 手持ちヘラケズリ（不定方向） [内面] ヘラカギー銀色処理	13.6	6.3	4.2	R-2041	
2	須恵器杯	外延溝土	[内外面] ロクロナゲー	13.6	5.6	4.4	R-2042	

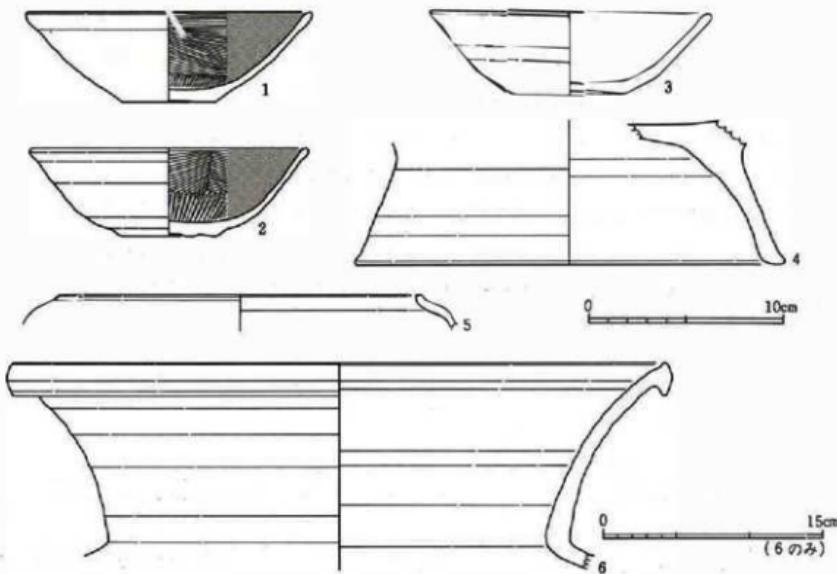
第12図 SD 1076出土遺物

SK 1084土壌（第4図）

SK 1084はSX1080の西側の地山上で発見した不整形の土壌である。西区と東区にまたがっており、南側をSD 1086によって大きく破壊されている。また、SX 1080、SD 1078・1087、SA 1084と重複しており、SA 1083とSD 1087より古いが他のものより新しい。規模は、東西約4m、南北5.4m以上である。堆積土は2層からなり、2層には混入物はほとんどないが、1層には土器や炭化物が多く含まれている。土器はほとんどが小破片であり、接合しないものが多い、遺物は、土師器杯、須恵器杯・甕・鉢、赤焼き土器杯・高台鉢などが出土している。第13図5の須恵器鉢は口縁部の破片資料であるが鉄鉢形と考えられる。

(5) 土器捨て場跡

SX 1080とSX 1081の2つの土器捨て場跡を発見した。両者は一連の遺構と考えているが、直接的な関係をとらえられなかったことから便宜上別々に説明する。また、これらの遺構からは土師器、須恵器、赤焼き土器の杯が多量に出土している。それらの数量の記載にあたっては可能な限り個体数で表示するように努めた。計量にあたっては口縁部の残存率を集計する方法を探った（註3）。



番号	種類	層位	特徴				口径	底径	高さ	登録番号
			外	内	部	底				
1	土器杯	第1層	クロロナゲ	ヘラミガキ	黒色処理		(14.8)	4.8	4.5	R-2040
2	土器杯	第1層	クロロナゲ	ヘラミガキ	黒色処理		(14.4)	(4.8)	4.5	R-2039
3	土器杯	第1層	クロロナゲ	ヘラミガキ	黒色処理		14.5	5.7	4.4	R-2038
4	土器	第2層	土器	土器	土器	土器				R-2068
5	土器	第1層	土器	土器	土器	土器	(18.6)			R-2515
6	土器	第2層	土器	土器	土器	土器	(45.0)			R-2083

第13図 SK 1084 出土 遺物

S X 1080 土器捨て場跡 (第14~16図、表1、図版2~5)

S X 1080は東区のほぼ中央において発見した土器の捨て場跡である。自然地形をそのまま利用し、浅い谷の部分に3回にわたって土器を一括廃棄したものである。第2層上面の一括土器を覆う堆積層などについては調査区全体にかかる堆積層としてとらえるべきであるとも考えられるが、谷全体を一つの造構と捉え、すべて造構内堆積層として記述する。S I 1077、S D 1078、S K 1085など岩盤上から掘り込んだ造構を覆っており、西側でS K 1084と重複してそれに切られている。南側は中世のS D 1086によって大きく破壊されている。また、昭和46年の調査トレンチは本造構の北西隅に位置している。堆積層は大別すると6層に分けることができる。そのうちの第3層は灰白色火山灰の自然堆積層であり、南側の低い部分にのみ約8~4cmの厚さで堆積している。それを直接覆う第2層は灰白色火山灰の小ブロックを含む層である。第3層を除く各層は土器杯類を主体とした包含層であり、そのうち第5・4・2層の上面において

一括廃棄された土器群のまとまりを確認した。以下、第5・4・2層上面の遺物、次に各層の遺物出土状況について説明する（以下、昭和46年のトレンチを旧トレンチと称す）。

第5層上面の遺物：一括廃棄された土器群の内、最も古いものである。そのまとまりは、旧トレンチの東壁から東西約0.5m、南北約1.4m（斜距離）と比較的小範囲である。土師器10、須恵器2、赤焼き土器杯14、合計26個体の杯を発見した。完形およびそれに近い状態で出土したもののは42.3%であり、そのうちの87.5%に油煙の付着が認められる。また内外面をヘラミガキ・黒色処理した土師器高台杯が1個体出土している（第17図3）。

第4層上面の遺物：灰白色火山灰の自然堆積層に直接覆われている土器群である。そのまと

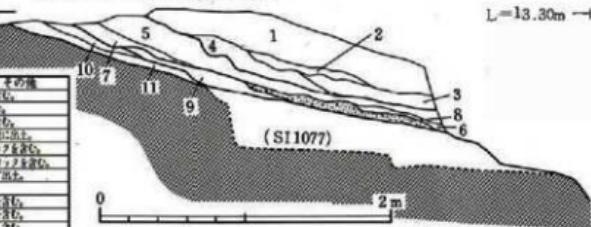
— L=14.00m — 西 区 東 区 —



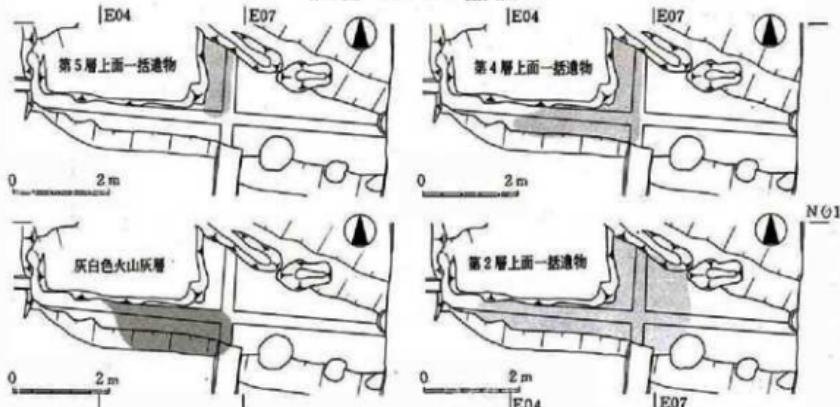
第14図 SX 1080以前の地形
第1層 1・2・3・4
第2層 5・6
第3層 7・8
第4層 9
第5層 10・11

番号	土 壤	土 物	主な い も の
1	薄層土	砂質土	土器・火入・石器等
2	中層土	砂質土	土器・火入・石器等
3	厚層土	砂質土	土器・火入・石器等
4	中層土	砂質土	土器・火入・石器等
5	中層土	砂質土	土器・火入・石器等
6	中層土	砂質土	土器・火入・石器等
7	中層土	砂質土	土器・火入・石器等
8	中層土	砂質土	土器・火入・石器等
9	中層土	砂質土	土器・火入・石器等
10	中層土	砂質土	土器・火入・石器等
11	中層土	砂質土	土器・火入・石器等

第14図 SX 1080以前の地形

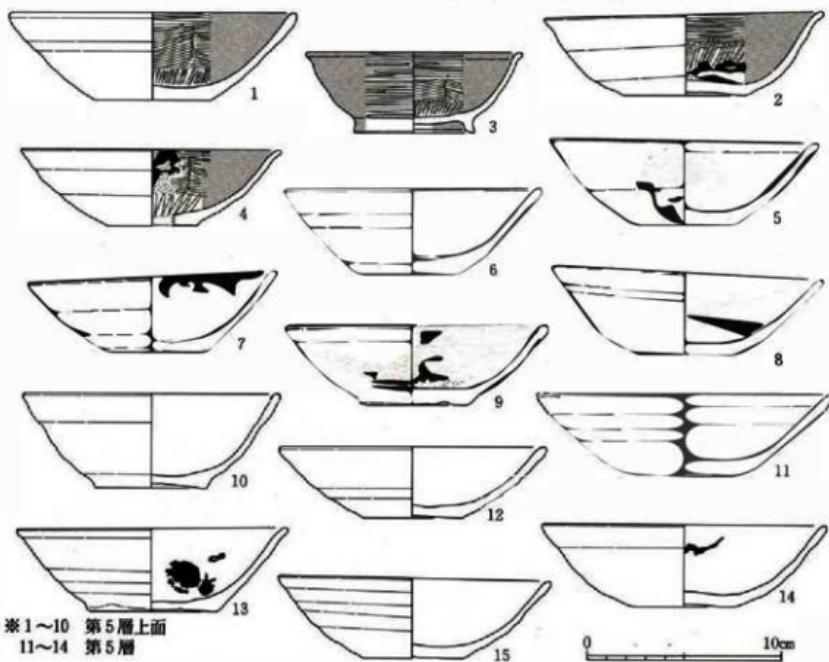


第15図 SX 1080 断面図



第16図 第5・4・2層上面一括遺物分布図

まりは、旧トレントから東西約2.7m、南北約2.5m（斜距離）に認められる。土師器45、須恵器8、赤焼き土器93、合計146個体の杯を発見した。完形およびそれに近い状態で出土したものは37.2%であり、そのうちの82.1%に油煙の付着が認められた。また、内外面をヘラミガキ・黒色処理した土師器高台杯1個体（第19図13）を発見した。土師器、須恵器、赤焼き土器が種



* 1~10 第5層上面

11~14 第5層

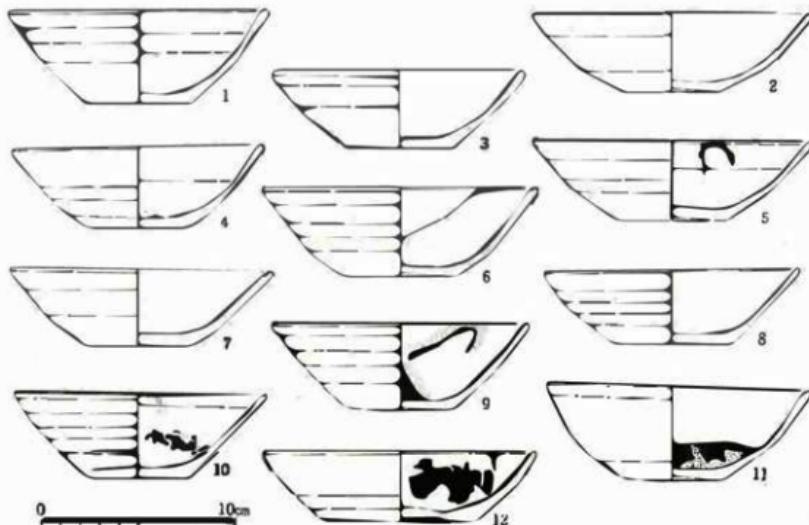
0 10cm

番号	種類	特徴	口径	底径	厚さ	登錄番号
1	土師器杯	【外面】ロクロナデ【内面】ヘラミガキ・黒色処理。口縁部：ツール状付着物	(14.9)	6.0	4.5	R - 664
2	土師器杯	【外面】ロクロナデ【内面】ヘラミガキ・黒色処理。植物性炭化物 体部：ツール状付着物【底部】体部下端：一部手待ちハケヅリ	14.4	6.3	4.1	R - 663
3	土師器高台杯	【外面】ロクロナデ【縁部】ヘラミガキ・黒色処理 【底部】先切り端・螺旋状孔	(11.2)	6.2	4.2	R - 2069
4	土師器杯	【外面】ロクロナデ【内面】ヘラミガキ・黒色処理。口縁部：植物性炭化物・ツール状付着物	13.6	4.8	3.9	R - 772
5	赤焼き土器杯	【外面】ロクロナデ【内面】ロクロナデ【縁部】ヘラミガキ・黒色処理	14.4	5.4	4.3	R - 775
6	赤焼き土器杯	【外面】ロクロナデ【内面】ロクロナデ。体部：煤付着【底部】ヘラミガキ	13.4	5.0	4.5	R - 722
7	赤焼き土器杯	【外面】ロクロナデ【内面】ロクロナデ。口縁部：ツール状付着物	13.0	4.8	3.8	R - 727
8	赤焼き土器杯	【外面】ロクロナデ【内面】ロクロナデ。【体部下端】内側：のみ底状に煤・ツール状付着物	14.1	4.8	4.3	R - 658
9	赤焼き土器杯	【外面】ロクロナデ。体部中央：煤・ツール状付着物【内面】ロクロナデ。体部：煤付着 底部：植物性炭化物【底部】ヘラミガキ	13.8	5.7	4.1	R - 726
10	須恵器杯	【外側】ロクロナデ【内面】ロクロナデ。体部：煤付着【底部】底色10Y 5/8/L。部分的に底色N 6/1に変色	(13.9)	(5.8)	4.9	R - 721
11	赤焼き土器杯	【外側】ロクロナデ。わざかにツール状付着物	(15.2)	6.5	4.5	R - 660
12	赤焼き土器杯	【外側】ロクロナデ【内面】ロクロナデ。わざかに煤・ツール状付着物【底部】部 ヘラナデ	(13.8)	5.1	3.7	R - 662
13	赤焼き土器杯	【外側】ロクロナデ【内面】ロクロナデ。体部：煤・植物性炭化物・ツール状付着物	14.1	6.9	4.3	R - 659
14	須恵器杯	【外側】ロクロナデ【内面】ロクロナデ。口縁部：煤・ツール状付着物。底部：植物性炭化物	(14.7)	5.2	4.2	R - 723
15	須恵器杯	【外側】ロクロナデ	14.1	5.2	4.1	R - 669

第17図 S X 1080 第5層上面・第5層出土遺物

類に關係なく数枚ずつ重なった状態で出土したものが多く認められる。

第2層上面の遺物：灰白色火山灰降下後に一括廃棄されたものである。その広がりは旧トレンチの東側と南側の広い範囲に認められ、東西約6.7m以上、南北2.3m(斜距離)以上におよんでいるが、最も集中しているのは旧トレンチの南東隅を中心とした東西約4.5m、南北約2.3m(斜距離)の範囲である。土師器180、須恵器12、赤焼き土器333、合計525個体の杯を発見した。完形およびそれに近い状態で出土したものは49.8%であり、そのうちの86.3%に油煙の付着が認められる。また、土師器柱状高台皿(?)、赤焼き土器小皿など第2層以下では出土していないものも1点ずつ出土している。第4層上面出土のものと同様に、土器の種類に關係なく数枚ずつ重なって出土したものが多く見られる。東区の西端部でS K 1084と重複しており、それ



番号	種類	特徴	寸	口径	底径	壁高	登錄番号
1	赤焼き土器杯	[外]面ロクロナデ [内]面ロクロナデ、口縁部:底付垂	(13.4)	5.5	4.8	R - 765	
2	赤焼き土器杯	[内外]面ロクロナデ	14.4	4.8	4.1	R - 773	
3	赤焼き土器杯	[外]面ロクロナデ [底]面ヘラガキ「ニ」	(13.0)	5.7	4.0	R - 766	
4	赤焼き土器杯	[外]面ロクロナデ [内]面ロクロナデ、底部:弧状に底・チール付垂物	13.0	5.2	4.2	R - 776	
5	赤焼き土器杯	[外]面ロクロナデ [内]面ロクロナデ、口縁部:チール付垂物(打芯痕跡)2ヶ所	(14.4)	5.0	4.2	R - 778	
6	赤焼き土器杯	[外]面ロクロナデ [内]面ロクロナデ、底部:底付垂物(打芯痕跡)1ヶ所	14.2	5.9	4.6	R - 679	
7	赤焼き土器杯	[内外]面ロクロナデ	13.6	5.4	4.1	R - 680	
8	赤焼き土器杯	[内外]面ロクロナデ	13.2	5.7	3.8	R - 777	
9	赤焼き土器杯	[外]面ロクロナデ [内]面ロクロナデ、口縁部:底・チール付垂物(打芯痕跡)4ヶ所	13.2	5.0	4.5	R - 686	
10	赤焼き土器杯	[外]面ロクロナデ [内]面ロクロナデ、体部:底・植物性炭化物・チール付垂物(打芯痕跡)1ヶ所	13.1	5.0	4.4	R - 684	
11	赤焼き土器杯	[外]面ロクロナデ [内]面ロクロナデ、体部:底・植物性炭化物・チール付垂物	13.6	4.9	4.9	R - 806	
12	赤焼き土器杯	[外]面ロクロナデ [内]面ロクロナデ、底部:植物性炭化物・チール付垂物	(14.0)	7.4	3.7	R - 780	

第18図 S X 1080 第4層上面出土遺物(1)

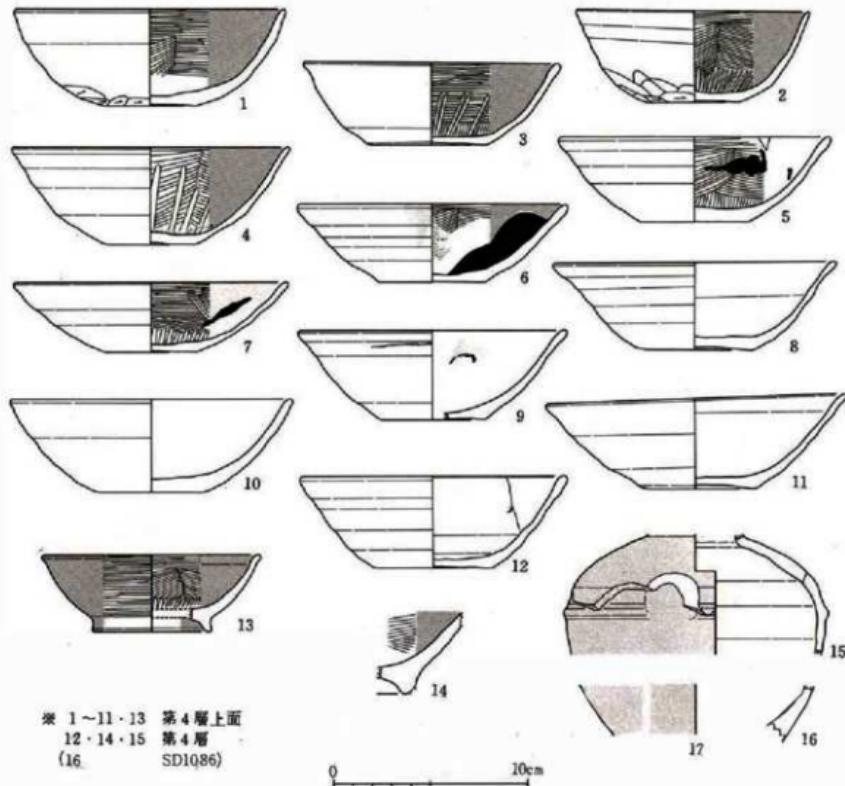


図 1~11・13 第4層上面

12・14・15 第4層

(16) SD1086)

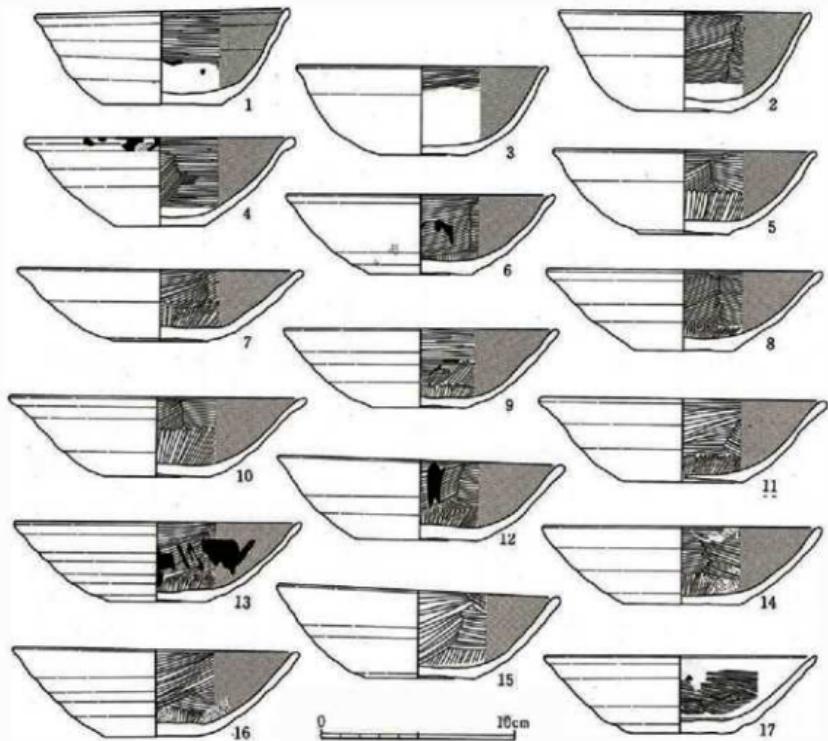
0 10cm

番号	種類	特徴	口径	底径	高さ	登録番号
1	土師器杯	【外】面ロクロナテ・体部下端・底部の一部手持らヘラケズリ【内】ヘラミガキ→黒色処理 ((13.9))	4.7	5.0	R - 782	
2	土師器杯	【外】面ロクロナテ・体部下端手持らヘラケズリ【内】ヘラミガキ→黒色処理	12.0	4.7	4.5	R - 687
3	土師器杯	【外】面ロクロナテ・体部下端手持らヘラケズリ・口縁部:植物性炭化物・脚部:ヘラミガキ→黒色処理	12.2	5.7	4.4	R - 1988
4	土師器杯	【外】面ロクロナテ・口縁部:液状黑色物【内】ヘラミガキ→黒色処理、底部:植物性炭化物	14.4	4.4	5.0	R - 850
5	土師器杯	【外】面ロクロナテ【内】ヘラミガキ→黒色処理脚部:せず、体部:底・タール状付着物	14.0	5.4	4.4	R - 767
6	土師器杯	【外】面ロクロナテ【内】ヘラミガキ→黒色処理、底部:植物性炭化物・体部:タール状付着物	(14.0)	5.6	4.3	R - 781
7	土師器杯	【外】面ロクロナテ【内】ヘラミガキ→黒色処理脚部:せず、体部:タール状付着物	14.2	4.7	3.6	R - 783
8	須恵器杯	【内外】面ロクロナテ【底部】糊・棒状压痕 【色】陶灰白色2、5Y8/1、内面大部・外面の一部灰色N5/に変色	14.5	5.5	4.5	R - 800
9	須恵器杯	【外】面ロクロナテ【内】面ロクロナテ、体部:底・タール状付着物(灯芯痕跡)1カ所 【色】陶灰白色N5/、内面の一部、灰色N5/に変化	12.9	5.2	4.6	R - 801
10	須恵器杯	【外】面ロクロナテ【内】面ロクロナテ、口縁部:底付着 【色】陶灰白色10YR8/1、内面口縁部以外・外表面から灰色N5/	(14.6)	5.4	4.8	R - 784
11	須恵器杯	【内外】面ロクロナテ【色】陶灰白色2、5Y7/、内面口縁部の一部外表面からN5/に変色	15.4	5.3	4.8	R - 854
12	須恵器杯	【外】面ロクロナテ【内】面ロクロナテ:底・タール状付着物	(13.8)	6.0	4.8	R - 739
13	土師器高台杯	【外】面高台部:ロクロナテ、杯部:ヘラミガキ→黒色処理【内】ヘラミガキ→黒色処理	(11.3)	(3.9)	(6.2)	R - 2071
14	土師器高台杯	【外】面ロクロナテ:ヘラミガキ→黒色処理、注口側底部1カ所【内】面ロクロナテ				R - 2074
15	須恵器高台	【外】面ロクロナテ:ヘラミガキ→黒色処理、注口側底部1カ所【内】面ロクロナテ				R - 2503

第19図 SX 1080 第4層上面(2)・第4層出土遺物

層位・種別	9.0	9.5	10.0	10.5	11.0	11.5	12.0	12.5	13.0	13.5	14.0	14.5	15.0	15.5	16.0	16.5	17.0	約14	器別 小計	合計	底 部 切 り 離 し	体部下端 底ハケズリ	ヘラ記号	墨 書	
	9.4	9.9	10.4	10.9	11.4	11.9	12.4	12.9	13.4	13.9	14.4	14.9	15.4	15.9	16.4	16.9	17.4								
第1層	土師器									1	3	3	2	1					34	44	静止系切り1				
	須恵器										1	1								2	165				1
	赤焼き土器									1	3	4	11	8	3	1				88	119				
第2層 上面	土師器	1		2		1	3	11	13	33	22	8					1	85	180	525	ヘラ切り3	5	④1 ①1	墨戲3	11
	須恵器									1	1	2	2	2				1	2	12		ヘラ切り5			4
	赤焼き土器		1			1	2	8	31	41	46	19	9	4	1			173	333			2	④11 ①2		5
第2層	土師器										1	1	1	1	1					34	40	141			
	須恵器										1		1						1	3					2
	赤焼き土器									1	1	1	7	9	2	1	1	1		74	98			①1	
第3層 上面	土師器												1	1						2	4	10			
	須恵器																								
	赤焼き土器										1	1	1							3	6				
第3層	土師器												1	1						8	10	31			
	須恵器												1							1					1
	赤焼き土器										1	2	1	2	1				13	20			④1 ①1		
第4層 上面	土師器					1	2	1	3	4	5	2							27	45	146	回転1	6		3
	須恵器										1	3	2	1					1	8				1	
	赤焼き土器								1	1	4	7	8	5	1	2	1			63	93			1	④1 ④1 ④1
第4層	土師器												1	1	2	1				14	19	53			
	須恵器												1												
	赤焼き土器												1	1	2	2				27	33				④1
第5層 上面	土師器												1	1	1	1				6	10	26			
	須恵器												1	1						2					④1
	赤焼き土器												1	1	2	1				9	14				
第5層	土師器														1	1	2			9	13	29			
	須恵器														1	1				1	3				1
	赤焼き土器														3					10	13				
研究所 調査分 (層位 不明)	土師器		1	1	2	2	3	5	23	31	38	9	4	2					257	378	894				
	須恵器									2	1	5	1	1					20	31					
	赤焼き土器								1	3	14	45	55	32	14	5	1	1		314	485				

表1 SX1080出土土器層位別個体数

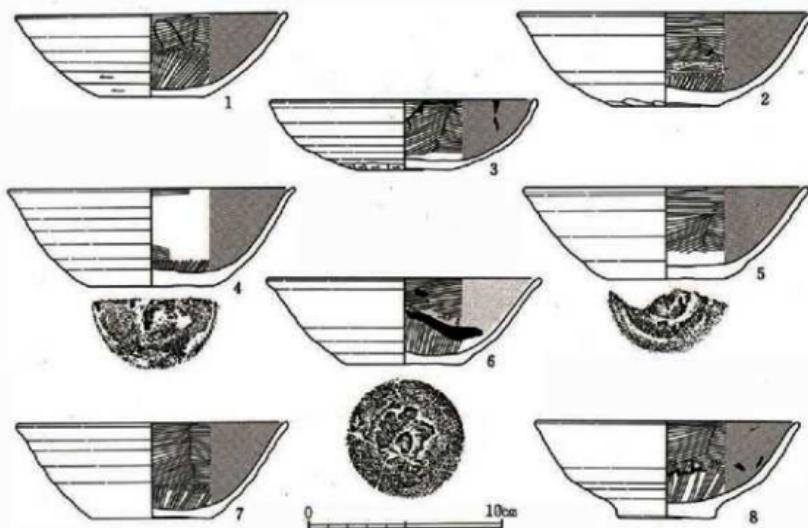


番号	種類	特徴	寸法	底径	最深	壁厚	登録番号
1	土師器	[外]ロクロナデ [内]ヘラミガキ→黒色處理。体部: テール状付着物、底部: 植物性炭化物	(13.2)	6.1	4.8	R - 25	
2	土師器	[外]ロクロナデ [内]ヘラミガキ→黒色處理。底部: 植物性炭化物、テール状付着物	(13.0)	4.8	5.1	R - 127	
3	土師器	[外]ロクロナデ [内]ヘラミガキ→黒色處理。体部: 植物性炭化物	(13.0)	4.4	4.6	R - 90	
4	土師器	[外]ロクロナデ。口縁部: テール状付着物 [内]ヘラミガキ→黒色處理。口縁部: 植物性炭化物	(14.0)	(4.5)	4.6	R - 95	
5	土師器	[外]ロクロナデ [内]ヘラミガキ→黒色處理	(13.6)	(4.6)	4.4	R - 158	
6	土師器	[外]ロクロナデ。底付着 [内]ヘラミガキ。[底付着: 方向→体側指向]→黒色處理 体部: ロクロナデ、底付着 [内]ヘラミガキ。	(13.9)	5.3	4.0	R - 97	
7	土師器	[外]ロクロナデ [内]ヘラミガキ→黒色處理	(14.8)	(4.8)	3.7	R - 38	
8	土師器	[外]ロクロナデ [内]ヘラミガキ→黒色處理。底部: 植物性炭化物、テール状付着物	(14.2)	(4.2)	5.0	R - 92	
9	土師器	[外]ロクロナデ [内]ヘラミガキ→黒色處理。体部: テール状付着物	(14.6)	5.0	(4.1)	R - 84	
10	土師器	[外]ロクロナデ [内]ヘラミガキ→黒色處理。底部: テール状付着物	(15.4)	5.4	4.1	R - 154	
11	土師器	[外]ロクロナデ [内]ヘラミガキ→黒色處理。[底付着]貼土層が目立つ	(14.8)	(5.9)	4.3	R - 143	
12	土師器	[外]ロクロナデ [内]ヘラミガキ→黒色處理。口縁部: テール状付着物 (芯孔痕跡) 1ヶ所	(14.8)	6.1	4.3	R - 33	
13	土師器	[外]ロクロナデ [内]ヘラミガキ→黒色處理。体部: 植物性炭化物、テール状付着物	(14.8)	(5.1)	(4.1)	R - 50	
14	土師器	[外]ロクロナデ。体部: [内]ヘラミガキ→黒色處理。底部: 黑褐色 ×、植物性炭化物	(14.4)	(6.0)	4.0	R - 144	
15	土師器	[外]ロクロナデ [内]ヘラミガキ→黒色處理。体部: テール状付着物 (芯孔痕跡) 2ヶ所	(14.6)	5.6	4.5	R - 18	
16	土師器	[外]ロクロナデ [内]ヘラミガキ→黒色處理。底部: 贼窓・底付着、テール状付着物	(14.8)	4.8	4.5	R - 14	
17	土師器	[外]ロクロナデ [内]体部: ヘラミガキ (半生糊り)、黒色處理跡あり 口縁部: ロクロナデ、底: テール状付着物 (芯孔痕跡)、底部: ロクロナデ	(14.0)	5.0	4.0	R - 575	

第20図 SX 1080 第2層上面出土遺物(2)

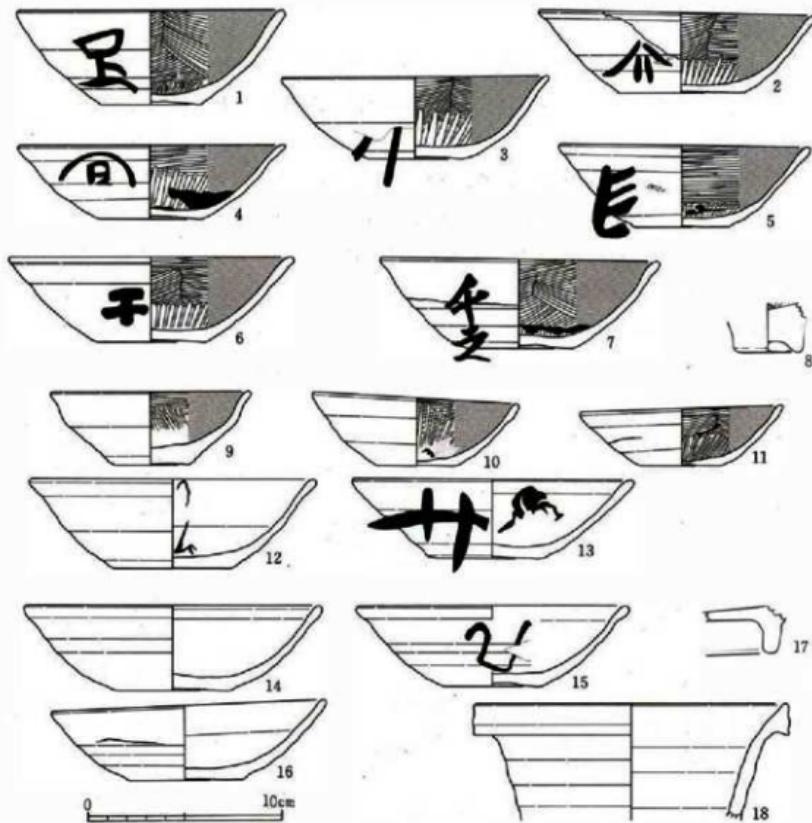
によって破壊されている。

次に、各層から出土している土器杯類の成形・調整手法についてみてみる。土師器杯はすべてロクロ調整したものであり、ロクロからの切離し後外面の再調整を行わないものが大部分であるが、体部から底部にかけて手持ちヘラケズリしたものが第5層から1点、第4層から2点、第4層上面から6点、第3層から2点、第2層上面から5点出土している。また、回転ヘラケズリしたものが第4層上面から1点出土している。手持ちヘラケズリしたものの内2点は軽い微調整程度のものである。底部の切離し手法は大部分が回転糸切りであるが、第2層上面からヘラ切りが3点、第1層から静止糸切りが1点出土している。赤焼き土器杯については、ロクロから回転糸切りで切離した後、体部から底部にかけて手持ちヘラケズリしたものが第4層上面で1点、第2層上面で2点出土している。いずれも微調整程度である。



番号	種類	特徴	口径	底径	高さ	登錄番号
1	土師器杯	【外面】ロクロナゲー体部下半部・底盤を回転ヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理、口縁部・ツール付着物（灯芯痕跡）	14.0	5.4	4.4	R- 64
2	土師器杯	【外面】ロクロナゲー体部下端・底盤の一部を手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理、底盤：植物性燃化物・ツール付着物	(15.1)	5.4	4.8	R- 73
3	土師器杯	【外面】ロクロナゲ（ロクロ目隠し）→体部下端部を手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理、口縁部・ツール付着物（點土）・石粉多く含む	(13.8)	4.8	3.6	R- 133
4	土師器杯	【外面】ロクロナゲ（内面）ヘラミガキ→黒色処理、底盤：ツール付着物（底盤目隠しヘラ切り）	(14.8)	(6.4)	5.1	R- 67
5	土師器杯	ロクロナゲ（内面）ヘラミガキ→黒色処理、底盤：植物性燃化物・底盤目隠しヘラ切り	(14.6)	(6.0)	4.8	R- 83
6	土師器杯	【外面】ロクロナゲ（内面）ヘラミガキ、黒色処理難易度：やすく、体部上端・底・ツール付着物（底盤）目隠しヘラ切り	14.2	6.0	4.5	R- 330
7	土師器杯	【外面】ロクロナゲ（内面）ヘラミガキ→黒色処理（底盤目隠しヘラ切り）	(14.0)	(6.2)	(4.9)	R- 94
8	土師器杯	【外面】ロクロナゲ（内面）ヘラミガキ→黒色処理、体部上端：ツール付着物	(13.6)	5.1	5.0	R- 123

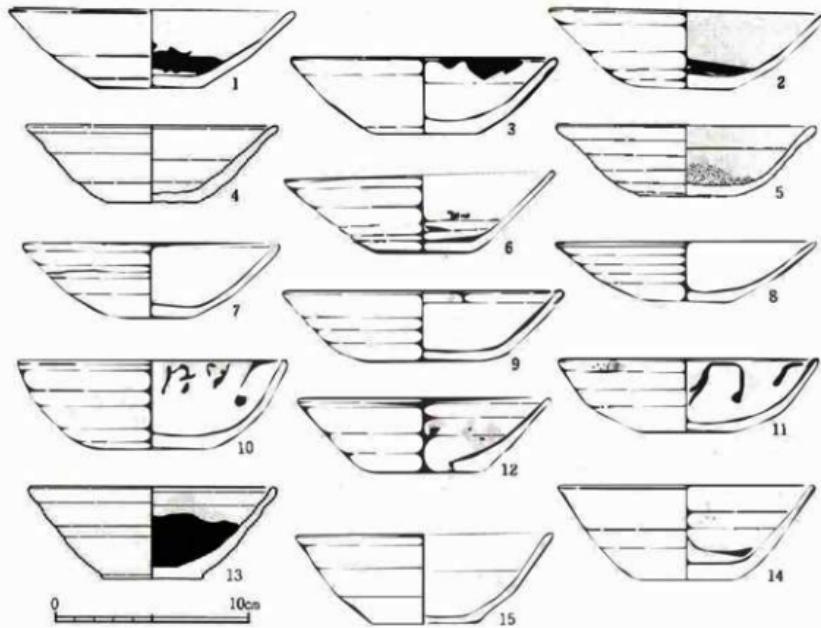
第21図 SX 1080 第2層上面出土遺物 (2)



番号	種類	特徴	口径	底径	高さ	登錄番号
1	土器皿杯	[外]ロクロナテ。体部: 黒褐色・足: 陶(正位) [内面]ヘラミガキ・黑色處理。底部: タール状付着物	(14.2)	(5.2)	5.0	R-1994
2	土器皿杯	[外]ロクロナテ。体部: 黑褐色・足: 陶(正位) [内面]ヘラミガキ・黑色處理。底部: タール状付着物	14.7	5.6	4.4	R-1995
3	土器皿杯	[外]ロクロナテ。体部: 黑褐色(脚部不明) [内面]ヘラミガキ(脚部底)・黑色處理。底部: タール状付着物	14.2	5.1	4.4	R-1993
4	土器皿杯	[外]ロクロナテ。体部: 黑褐色(脚部不明)	14.2	5.3	3.9	R-1995
5	土器皿杯	[外]ロクロナテ。体部: 黑褐色。底部: 植物灰化物	13.3	4.9	4.3	R-1992
6	土器皿杯	[外]ロクロナテ。体部: 黑褐色	15.0	5.6	4.5	R-2001
7	土器皿杯	[外]ロクロナテ。体部: 黑褐色・千字(正位) [内面]ヘラミガキ・黑色處理。口縁・底部: タール状付着物	14.8	5.4	4.8	R-2000
8	土器皿高台	[外]不規 [内面]ヘラミガキ・黑色處理・高台状高台			3.2	R-2073
9	土器皿杯	[外]ロクロナテ [内面]ヘラミガキ・黑色處理 [底部]切妻し不明、ヘラ切ぎ	(10.6)	3.8	3.9	R-129
10	土器皿杯	[外]ロクロナテ [内面]ヘラミガキ・黑色處理。底部: 植物灰化物・タール状付着物	10.9	4.4	3.9	R-141
11	土器皿杯	[外]ロクロナテ [内面]ヘラミガキ・黑色處理。口縁部: タール状付着物	10.8	4.2	3.0	R-113
12	土器皿杯	[外]ロクロナテ [内面]ロクロナテ。底部: タール状付着物・内側底の大部分の黒色に変じ、多處にもろい	(14.8)	6.0	4.6	R-655
13	土器皿杯	[外]ロクロナテ。体部: 黑褐色 (正位) [内面]ロクロナテ。体部: タール状付着物	(14.6)	(5.6)	4.1	R-2004
14	土器皿杯	[外]ロクロナテ	(15.4)	5.3	4.4	R-656
15	土器皿杯	[外]ロクロナテ。体部: 黑褐色・几字 (脚部) [内面]ロクロナテ。口縁: 体部: 薄付唇	(14.2)	5.1	4.2	R-2005
16	土器皿杯	[外]ロクロナテ	14.2	5.8	3.9	R-654
17	灰陶陶器	[外]ロクロナテ。系合端部に棘あり [内面]残存部: 破なし				R-2113
18	灰陶陶器	[外]ロクロナテ				R-2086

第22図 S×1080 第2層上面出土遺物(3)

墨書土器は第4層を除く各層から32点出土しており、その他墨痕の認められるものが3点出土している（表1、図版12）。断片であったり遺存状態が悪いことから判読できたものは少ない。第22図13は、体部に正位で「サ」と太い字で書いているものである。「二十」と見れば特別問題ないが「ヰ」は「菩薩」の異体字であり、「サ」一文字で「菩」を示している可能性が



番号	種類	特徴	口径	直径	高さ	壁厚
1	赤褐色土器杯	外面 ロクロナデ [内面] ロクロナデ、体部下半部: タール試付遺物	14.8	5.1	4.0	R - 261
2	赤褐色土器杯	外面 ロクロナデ [内面] ロクロナデ、体部下部に付着物、底床・植物性炭化物・タール試付遺物	14.2	4.7	4.0	R - 555
3	赤褐色土器杯	外面 ロクロナデ [内面] ロクロナデ、口縁部、底床・タール試付遺物	13.6	5.2	4.0	R - 333
4	赤褐色土器杯	外面 ロクロナデ [内面] ロクロナデ、口縁部 [注記: 茶色]	(13.0)	(4.6)	4.0	R - 296
5	赤褐色土器杯	外面 ロクロナデ [内面] ロクロナデ、底床・植物性炭化物・タール試付遺物	13.4	5.1	3.7	R - 626
6	赤褐色土器杯	外面 ロクロナデ [内面] ロクロナデ、体部下部: タール試付遺物	13.8	5.0	4.0	R - 569
7	赤褐色土器杯	[外面] ロクロナデ	(13.2)	4.0	3.8	R - 577
8	赤褐色土器杯	[外面] ロクロナデ	(13.4)	4.4	3.1	R - 384
9	赤褐色土器杯	外面 ロクロナデ [内面] ロクロナデ、口縁部: タール試付遺物 (注: 茶色)	(14.4)	(5.8)	3.6	R - 551
10	赤褐色土器杯	外面 ロクロナデ、口縁部: タール試付遺物 (注: 茶色) 5.2 cm [内面] ロクロナデ、口縁部、タール試付遺物 (注: 茶色) 5.2 cm	13.9	6.0	4.6	R - 378
11	赤褐色土器杯	外面 ロクロナデ、口縁部: タール・植物性炭化物・タール試付遺物 (注: 茶色) 3.0 cm	13.4	4.9	3.7	R - 355
12	赤褐色土器杯	外面 ロクロナデ [底盤: 付着物へラケズリ (一定方向)] [内面] ロクロナデ、体部下部: タール試付遺物	(13.0)	(6.0)	3.8	R - 561
13	赤褐色土器杯	外面 ロクロナデ [内面] ロクロナデ、底床・付着物: タール試付遺物	(13.8)	5.2	4.8	R - 334
14	赤褐色土器杯	外面 ロクロナデ [内面] ロクロナデ、体部下部: タール試付遺物	(13.2)	5.2	4.9	R - 361
15	赤褐色土器杯	[外面] ロクロナデ	(13.2)	5.2	4.6	R - 337

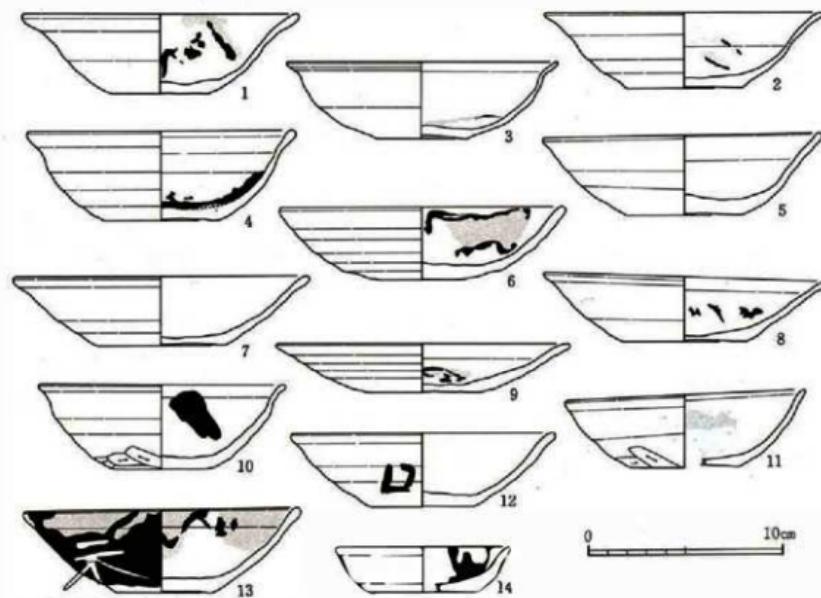
第23図 S X 1080 第2層上面出土遺物(5)

ある。このことから直ちに本資料が「昔」を示すとは言えないが、「昔」を「本」と書いた例は8世紀中頃までさかのばることが確認でき(註4)、一つの可能性として指摘しておきたい。

底部にヘラ記号のあるものが23点出土している。すべて焼成前に描かれたものであり「X」「！」の二種類がある。焼成後、釘状の工具で内面一杯に「X」と描かれた土師器も1点出土している(第20図14)。

S X 1081土器捨て場跡

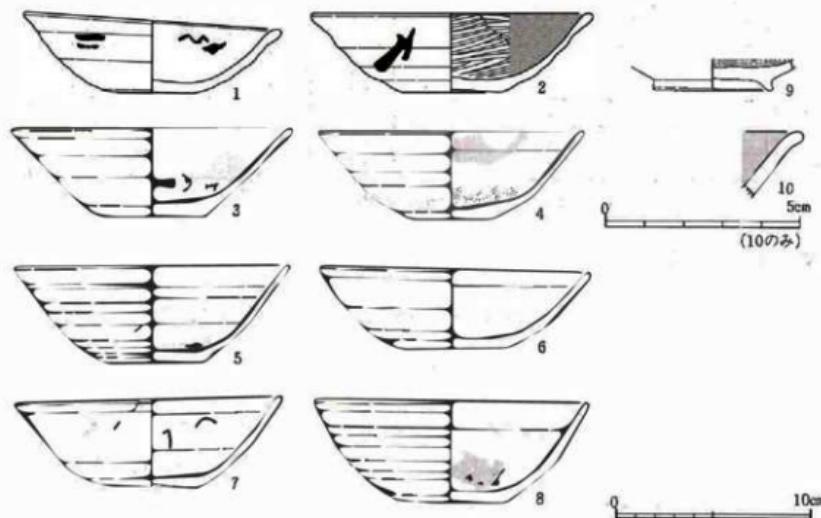
S X 1081は西区南東隅で発見した土器捨て場跡である。第2次整地層やS X 1107を覆っており、北側はS D 1086によって大きく破壊されている。西側はW 2ラインより延びていないが東



番号	種類	特徴	寸法	厚さ	底面	試験番号
1	直腹浅土器	内面 ロクロナイト 内面 ロクロナイト、口縁部・底・テール付付物 (口付跡) 1点	(14.2)	5.0	4.1	R - 412
2	直腹浅土器	内面 ロクロナイト 内面 ロクロナイト、底・テール付付物 (口付跡) 1点	14.4	5.0	3.8	R - 211
3	直腹浅土器	内面 ロクロナイト 内面 ロクロナイト、底・テール付付物 (口付跡) 1点	14.0	4.8	4.0	R - 313
4	直腹浅土器	内面 ロクロナイト 内面 ロクロナイト、底・テール付付物	(14.0)	6.0	4.6	R - 300
5	直腹浅土器	内面 ロクロナイト 体部・底付物 (口付跡) 1点	14.2	6.0	4.1	R - 916
6	直腹浅土器	内面 ロクロナイト 内面 ロクロナイト、口縁部・底・テール付付物 (口付跡) 1点	14.8	4.6	3.8	R - 404
7	直腹浅土器	内面 ロクロナイト 内面 ロクロナイト、口縁部・底・テール付付物 (口付跡) 1点	14.7	6.5	3.8	R - 405
8	直腹浅土器	内面 ロクロナイト 内面 ロクロナイト、底付物 (口付跡) 1点	14.4	6.3	3.3	R - 509
9	直腹浅土器	内面 ロクロナイト 内面 ロクロナイト、底付物 (口付跡) 1点	(15.1)	6.0	2.5	R - 386
10	直腹浅土器	内面 ロクロナイト 内面 ロクロナイト、底付物 (口付跡) 1点	(13.0)	4.8	4.4	R - 111
11	直腹浅土器	内面 ロクロナイト 体付物 (口付跡) 1点	14.7	5.0	4.0	R - 303
12	直腹浅土器	内面 ロクロナイト 体付物 (口付跡) 1点	(15.0)	5.5	3.8	R - 3003
13	直腹浅土器	内面 ロクロナイト、口縁部・底付物 (口付跡) 1点	14.4	5.0	4.4	R - 2002
備考 (9), (10) 砂ベニ特徴						
内面 ロクロナイト、口縁部・底付物 (口付跡) 1点						

第24図 S X 1080 第2層上面出土遺物(6)

側と南側は調査区外へ延びている。確認した範囲は東西約3m、南北約4.5mである。堆積層は3層に大別することができ、そのうちの第3層に灰白色火山灰の小ブロックが含まれている。この第3層上面において一括発見された多量の土器杯を発見した。完形かそれに近い状態のものが多く、中には数枚重なった状態で出土したものもある。土師器155、須恵器9、赤焼き土器141、合計305個体の杯を発見した。体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリした土師器が7点、赤焼き土器が1点出土している。また、第3層から綠釉陶器の小破片が1点出土している。体部に凸帯のめぐら瓶であり、接合しないがS X 1080第4層上面から出土したものと同一個体と考えられる。



番号	種類	位置	特徴	口径	底径	高さ	重量(g)
1	赤焼き土器杯	第1層	[外面] ロクロナデ、外面全体に墨書きあり(判読不能) [内部] 体部・タール状付着物	(13.4)	3.8	3.7	R - 986
2	土師器杯	第1層	[外面] ロクロナデ、外面全体に墨書きあり(判読不能) [内部] ヘラミオキ+黒色処理	(14.6)	(5.2)	4.1	R - 1990
3	赤焼き土器杯	第1層	[外面] ロクロナデ [内部] ロクロナデ、体部上・下位・底・タール状付着物あり [底] 磁石粒多い	14.5	5.4	4.5	R - 1019
4	須恵器杯	第1層	[外面] ロクロナデ [内部] ロクロナデ、口縁部・底付着、底部:植物性炭化物	13.8	4.2	4.6	R - 1017
5	須恵器杯	第2層	[外面] ロクロナデ [ロクロ振書き] [内部] ロクロナデ、底部に漆付着	14.2	5.2	5.0	R - 920
6	須恵器杯	第2層	[外面] ロクロナデ [内部] ロクロナデ、口縁部・底付着 [底] 手持ちヘラケズリ [色刷] に黒・黒色10YR 5/1	14.1	5.8	4.1	R - 917
7	須恵器杯	第2層	[外面] ロクロナデ [内部] ロクロナデ、タール状付着物(行芯痕跡か) [色刷] 黄褐色7, SYR 1/4、外面付着・底部、黒色色10YR 5/1	13.9	4.7	4.5	R - 919
8	須恵器杯	第2層	[外面] ロクロナデ [内部] ロクロナデ、底部に漆付着	(14.2)	5.9	5.2	R - 921
9	土師器蓋合杯	第1層	[外面] ロクロナデ [内部] ヘラミガキ(底部:一方)→黒色処理				R - 2072
10	赤焼き土器	第2層	[外面] ロクロナデ [内部] ロクロナデ・灰物				R - 2111

第25図 S X 1080第1・2・3層出土遺物

口 横		11.0 11.5 11.4	12.0 12.5 11.9	12.5 11 12.4	13.0 1 12.9	13.5 1 13.4	14.0 1 13.9	14.5 1 14.4	15.0 1 14.9	15.5 1 15.4	16.0 1 15.9	約14 16.4	層位・種別	合計	底切り 削し	底面下端 底面下端	ヘラ 記号	基 本	基 本
第1層	土 壴 器				1	1	1	1				1	5	8					
	埴 惠 器					1	1	1					3						
	赤 増 合 土 器														◎1				
第2層	土 壴 器											8	8	25					
	埴 惠 器					1	1					2	4						
	赤 増 合 土 器				1	1					11	13	◎1		2				
第3層 上 面	土 壴 器	1	1	2	7	10	15	3	3	1	1	111	155	305	7	◎1	◎1	◎1	1
	埴 惠 器					1	1			1		6	9						
	赤 増 合 土 器	1	4	6	17	19	13	3	1			85	141		1		7	1	
第3層	土 壴 器											4	4	8					
	埴 惠 器											1	1						
	赤 増 合 土 器											3	3				1		
邊縁外	土 壴 器											8	8	17					
	埴 惠 器											1	1						
	赤 増 合 土 器											8	8						

表2 SX1081出土土器層位別個体数

2 中世以降

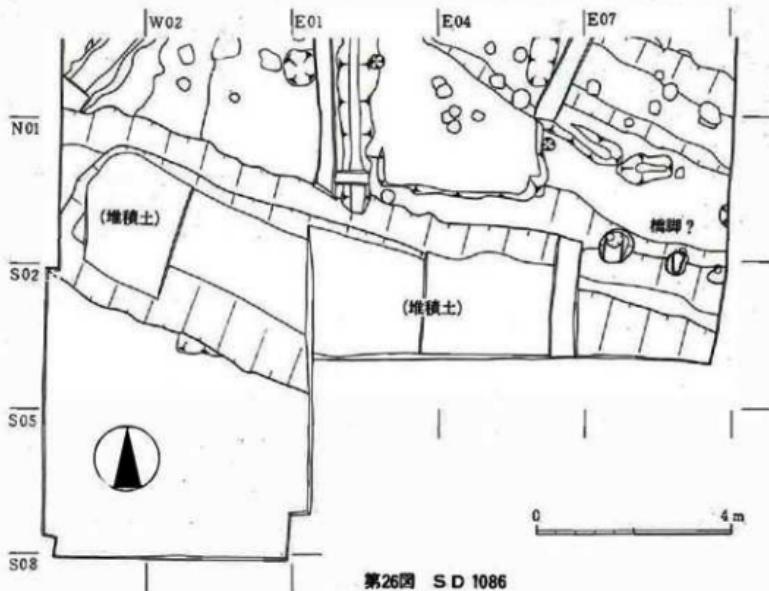
中世以降の遺構としては溝跡2条、土壙2基などを発見した。以下、SD1086溝跡とその出土遺物について概要を述べる。

SD1086溝跡（第26図）

SD1086は調査区中央部で発見した東西溝である。丘陵斜面を斜めに横断しており、両端とも調査区外へ延びている。検出した長さは約14mである。第II層から掘り込んでおり、凝灰岩の岩盤を掘り抜いている。SX1080・1081、SD1087より新しく、本溝跡より新しい遺構は発見していない。方向は、発掘基準線に対して東で約20度南に偏している。西区においては壁は緩やかに立ち上がっているが、東区においては北壁に段がついている。底面は平坦である。規模は、上幅4.0~3.7m、深さ約1.4mである。堆積土についてみると、1層は径2.0~1.0cmの白色の凝灰岩ブロックを多く含んだ砂質土層であり、北側から大きく傾斜して堆積している。2層は締まりの無い粘質土や植物質腐食土などがほぼ水平に堆積しており、グライ化している。1層については東西わずか3m離れると堆積土の色調や混入物の内容が異なっており、人為的埋め戻しによる堆積土である可能性が高い。なお、調査区東端部において、北壁に東西に並ぶ柱穴を3基発見した。柱はすべて抜き取られており詳細は不明であるが、位置的に見て橋脚の可能性がある。

遺物は、無釉陶器甕、瓦質土器擂鉢、円盤状土製品、磁石、鉄津、下駄、漆器皿などの他、

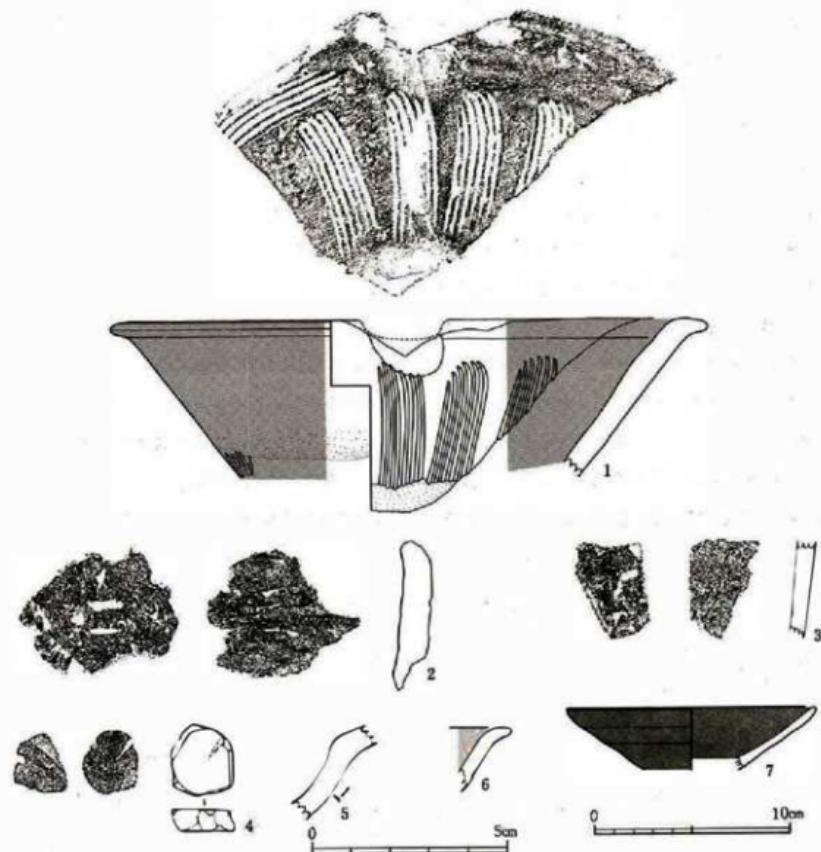
自然遺物の歯骨（ウマ？右寛骨）、貝類（カキ、イガイ）、種子が出土した。また、古代のものであるが、土師器杯・高台杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯、青磁碗、灰釉陶器碗、瓦なども出土している。第27図1は瓦質土器壠鉢である。焼成によって内外面とも黒色である。筋目は6本1単位であり、体部には縦方向に直線で、口縁部付近には横方向に波状線で施されている。片口は指でつまみ出して作られている。年代については「VI 考察」の中で触れるが、およそ15・16世紀と考えている。5は施釉陶器鉢の体部破片資料である。外面は下部が露胎であるが他の部分には白色の長石釉が施されている。これは、美濃窯の施釉陶器の中で志野と称されているものであり、初現年代は16世紀末とされている。7は古代の青磁碗である。剥落している部分が多いが、内外面に薄くにぶい黄色の釉が施されている。中国越州窯系の製品と考えられ、年代は9・10世紀頃とされている（註5）。第28図1・2は下駄である。いずれも台板の裏面に溝を彫り、その中から台板の表に貫通する孔を開け、そこに差歎の柄を差し込んで固定した「露卯下駄」と呼ばれているものである。1・2ともに第2層から出土しており、形態と規模は酷似している。1は前歎を差し込む孔の中に柄の一部が残存しており、2は後歎が台板に装着されたままの状態で出土した。2は前歎を差し込む溝から台板にかけて削り、平坦にしている。かつて歎を差し込むための溝が存在したことがそのわずかな痕跡から確認できる（第28図2※）。3は漆器皿である。外面は黒漆塗りであり、体部に草花文かとみられる文様を朱漆で描いている。内面ははじめに黒漆を塗り、その上に朱漆を施したものである。



第26図 SD 1086

3 年代不明の遺構

古代と中世のどちらに属するか年代を明らかにできない溝跡2条、柱列跡2条を発見した。

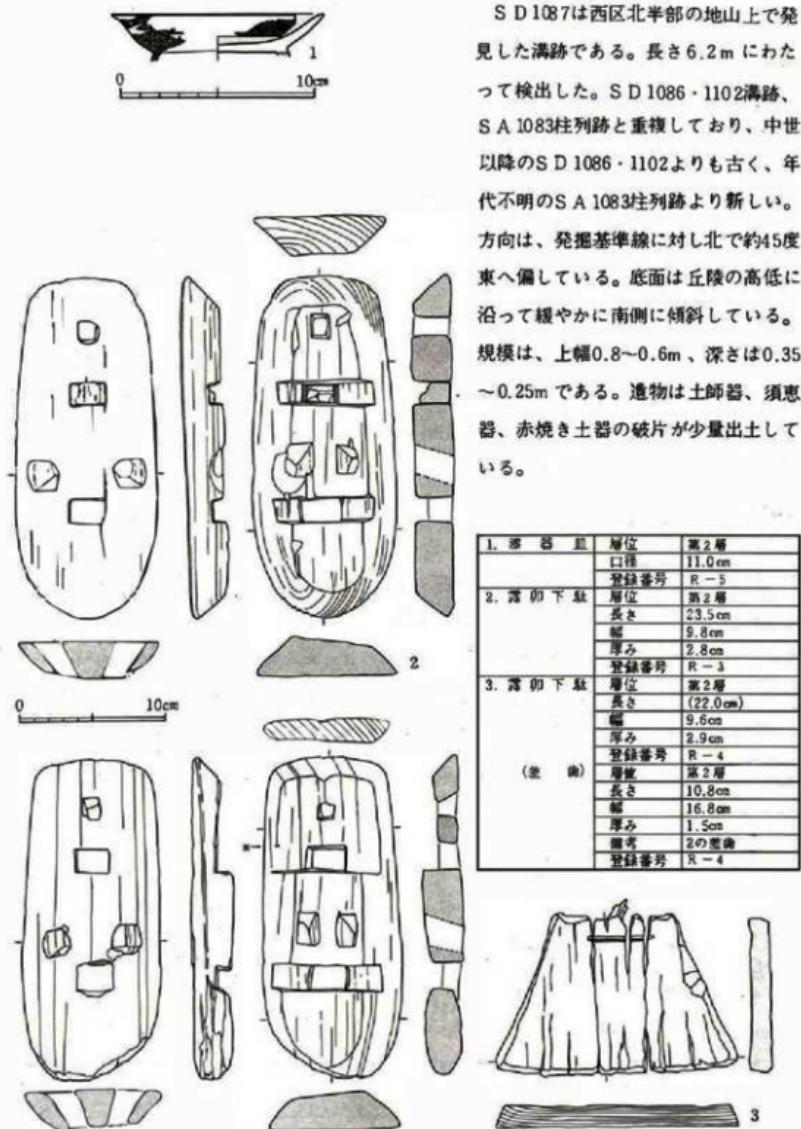


番号	種類	層位	1)	2)	3)	口径	底	U	型式番号
1	瓦質土器破片	第2層	【外】上半部：表面削落著しい。下半部：工具によるナメ 【内】5㌢) 手前の器底。焼け様			(30.6)			R-2082
2	無柄陶器底	第2層	【外】(表面)不明 (内面)ヨコナメ						R-2122
3	無柄陶器底	第1層	【外】(表面)不明 (内面)ヨコナメ						R-2123
4	円盤状土製品	第1層	所持陶器の側面端方を知る。166g						R-2121
5	無柄陶器底	第1層	【外】上半部：瓦石神。下半部：回転ヘラケズリ (内面)瓦石神						R-2120
6	灰陶陶器底	第1層	【外】ヨコナメ (内面)灰陶						R-2112
7	W 磁	第1層	【内外】(上)黄色2、5 Y 6/3の様 (地)白色 R 7/4強			(12.8)			R-2105

第27図 SD 1086 出土遺物(1)

SD 1087

SD 1087は西区北半部の地山上で発見した溝跡である。長さ6.2mにわたって検出した。SD 1086・1102溝跡、SA 1083柱列跡と重複しており、中世以降のSD 1086・1102よりも古く、年代不明のSA 1083柱列跡より新しい。方向は、発掘基準線に対し北で約45度東へ偏している。底面は丘陵の高低に沿って緩やかに南側に傾斜している。規模は、上幅0.8~0.6m、深さは0.35~0.25mである。造物は土師器、須恵器、赤焼き土器の破片が少量出土している。



第28図 SD 1086 出土遺物 (2)

S D 1088

S D 1088は西区北半部の地山上で発見した溝跡である。わずか2.7m検出したのみであり、ほかの遺構との重複関係はない。方向は、発掘基準線に対し北で約51度東へ偏している。規模は、上幅0.8m～0.7m、深さは0.18～0.08mである。遺物は出土していない。

S A 1082

S A 1082は東区で発見した東西2間の柱列跡である。S D 1102の堆積土をすべて除去した後、地山上で検出した。方向は、発掘基準線に対し東で4度0分南に偏している。柱間は西より1.94m、1.54m、総長3.48mである。柱穴は、長径36cm、短径30cmの楕円形、あるいは長辺23cm、短辺31cmの隅丸方形である。柱は柱痕跡より径15～13cmである。

S A 1083

S A 1083は西区の地山面で発見した東西2間の柱列跡である。S D 1087溝跡、S K 1084土壙と重複しており、それより新しい。方向は、発掘基準線に対し東で5度43分南に偏している。柱間は約1.7mとほぼ等間隔であり、総長3.49mである。柱穴は、長辺35cm、短辺25cmの不整形であり、柱は柱痕跡より径16～12cmである。

4 遺構外出土の遺物

第Ⅰ層から古代の土師器杯、須恵器杯、赤焼き土器杯、瓦、中世の施釉陶器丸皿・天目茶碗、瓦質土器擂鉢などが出土している。丸皿（第29図1）と天目茶碗（2・3）はいずれも瀬戸・美濃窯製品と見られる。1は内外両面に施釉されていることから大窯期の製品と考えられるが詳しい年代については不明である。瓦質土器擂鉢は2点出土している。第29図4は口縁部の先端を外側に引き出さずにそのまま丸めたものであり、内側に軽い段がある。5は横方向の直線の筋目と横方向の波状線の筋目が施されている。いずれも胎土も灰白色であり、焼け焼きによって表面は少し光沢をもっている。



編号	種類	断面	特徴	寸法	寸法	寸法	寸法
1	施釉陶器丸皿	内側	ロコターナー施釉	直径：16.8	高さ：11.6(2)	10.8	2119
2	天目茶碗	外側	ラッケズリ(内側)施釉	直径：16.8	高さ：11.6(2)	10.8	2117
3	天目茶碗	内側	ロコターナー(内側)施釉(裏面)	直径：16.8	高さ：11.6(2)	10.8	2118
4	瓦質土器擂鉢	裏面	ロコターナー(内側)施釉(裏面)	直径：23.0	高さ：10.0	2080	
5	瓦質土器擂鉢	裏面	ロコターナー(内側)施釉(裏面)、体部：横方向・直線、体部上辺：横方向・波状線	直径：23.0	高さ：10.0	2081	

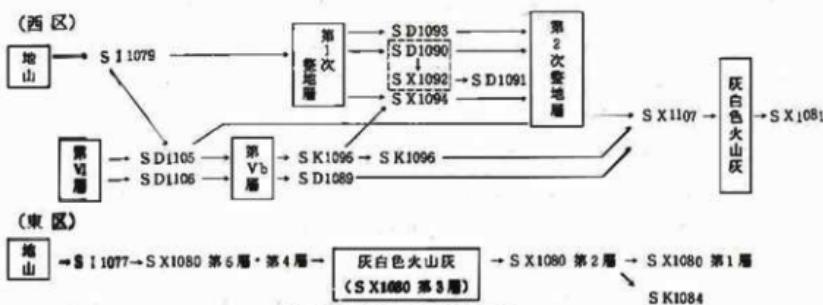
第29図 遺構外出土の遺物

VII 考察

1 古代

(1) 遺構の年代

今回の調査で発見した古代の遺構には竪穴住居3、石組暗渠1、落ち込み1、土器捨て場2およびいくつかの土壤、溝があり、2時期にわたる整地層も確認した。これらの重複関係を西区と東区に分けて示すと次のようになる。



第30図 遺構重複関係模式図

第2次整地層より下層の遺構については確認調査にとどめたため、年代を明らかにできなかつたものが多い。第1次整地層上面で検出したS D 1090・SX 1092およびそれらと一連の排水施設とみているSX 1094・SD 1091についてはSX 1092の施設瓦として多賀城創建期の瓦が使用されていることから年代は8世紀前半以降である。また、これらの遺構より確実に古い地山面検出のSI 1079、第Vb層上面検出のSD 1105・SD 1106、第Vb層上面検出のSK 1095などの年代は8世紀前半以前とすることができる。東区の地山面で発見したSI 1075の年代はロクロ調整の後、体部下半を持ちヘラケズリした土師器が出土していることからおよそ9世紀と考えられる。SI 1077についてはロクロ調整による土師器が出土していることからおよそ9世紀以降と考えておきたい。SX 1080は10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰との関係から10世紀前半を中心としてその前後の時期とみることができる。SX 1080より新しいSK 1084は10世紀前半以降ととらえておきたい。

(2) 土器捨て場について

この遺構については、昭和46年の調査結果のまとめがすでに報告されており、同報告において本遺構の性格を万燈会のような仏教儀式で使用した灯明皿を一括廃棄したものと考えている（註6）。今回の調査においても、おおよそその見解に沿った結果が得られている。ただ、その

時の調査はS X 1080の北西隅を調査したにすぎず、調査面積も10m²に満たない狭い範囲を対象としたものであったのに対し、今回は比較的広い範囲を調査したことによっていくつかの新しい知見が得られている。以下、前回の報告をふまえながらまとめを行う。

①多量の土器は土壌に廃棄されたと考えられていたが、自然の谷のくぼみに上方から投棄したものであることが判明した。S X 1080形成以前の地形は、第14図に示したように本造構からS X 1081にかけて深い谷となっている。

②多量の土器は合計3回にわたる廃棄の結果であることが判明した。1回目と2回目の間には薄い間層があり、2回目と3回目の間には灰白色火山灰の自然堆積層と厚い間層が存在していることから明らかである。また、第5層から出土した完形に近い土器10点の内8点がその上層出土資料と同様な灯明皿であることから、1回目の一括廃棄以前に灯明皿の廃棄が行われていた可能性が高い。

③灰白色火山灰の自然堆積層を発見した。同層は10世紀前半に降灰したとされていることからその上下の層から出土した土器に対して年代の定点を与えることができた。また、同層を媒介とすることによって他の遺跡から出土した土器との比較が可能になった。

④出土した土器はほとんどが平底の杯である。しかも完形があるいはそれに近い状態であり、本来はすべて完形であったと推定される。それ以外の器種としては縁軸陶器多口瓶、両面黒色処理した土師器高台杯があるのみである。須恵器甕、瓦、砥石なども出土しているが須恵器と瓦はいずれも小片であり、量も少ないとから混入品とみられる。S X 1080は、儀式などで使用した灯明皿のみを捨てた場所と考えられる。

⑤杯は斜面においても7~10点重なった状態で出土したものが多く確認できる。儀式での使用を終えて片付ける際に数枚ずつ重ねて紐で縛り、そのままS X 1080に投棄した状況を想定することができる(註7)。

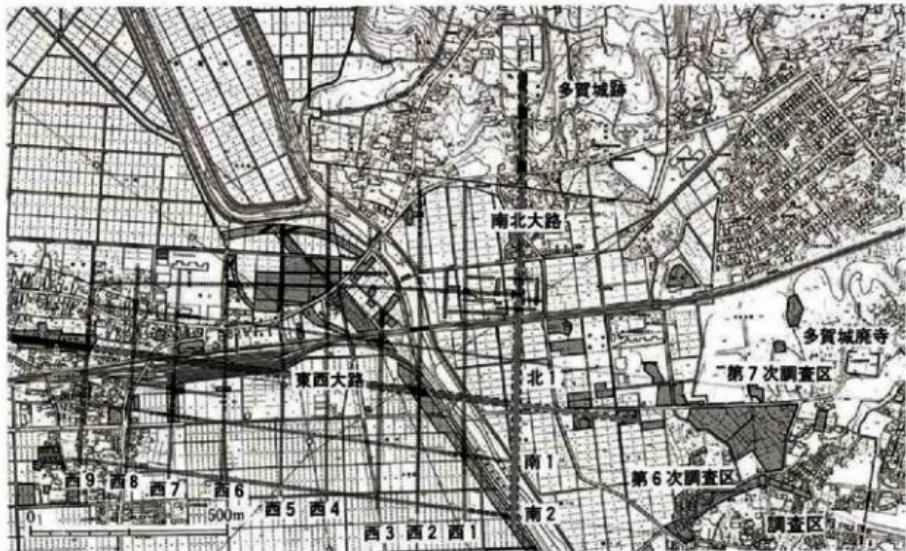
⑥S X 1081は今回の調査で新たに発見したものであり、中世の大溝をへだててS X 1080の南側に位置している。S X 1080との平面的な関係は捉えることができなかつたが、S X 1080第2層とS X 1081第3層は灰白色火山灰のブロックを含んでいることから少なくとも両者は火山灰降下後の堆積層であることは確実である。両者とも同一の谷に位置しており、距離的にも近接していることを考慮するならばそれらは同時期の堆積層である可能性が高いと考えられる。土器の出土状況や土器群の構成も共通しており、S X 1080第2層上面とS X 1081第3層上面の土器群は同時期に廃棄された一連の土器群として理解することができると考えられる。

⑦一括廃棄された土器杯の数量は表1に示したとおりである。昭和46年出土資料については各層のものをすべて一括で取り上げているため、今回の調査結果にもとづき、層ごとに比例配分を行った(註8)。また、S X 1081から出土したものは第2層上面出土のものに加算した。その

ような操作を行った結果、第5層上面47個体、第4層上面262個体、第2層上面1,246個体という数値が得られた。中世の大溝によって大きく破壊されているため実際はそれよりはるかに多くの杯が使用・廃棄されたと考えられる（表3）。

ところで、SX 1080・1081は万燈会のような仏教儀式で使用した灯明皿を捨てた場所であって、実際に儀式を執り行った場合ではない。儀式を行った場所として多賀城廃寺を想定することもできようが、500mも離れた本地点まで運んできて捨てたという理由が説明できないであろう。また、儀式を行うに相応しい施設の存在を現時点では近辺に想定することは難しい。SX 1080と同時期のもので性格的に類似している遺構は山王跡第4次調査で発見したSX 161である。東西大路に面した土壇であり、灯明皿が一括廃棄されていることから大路で万燈会のような儀式を執り行い、使用した灯明皿を一括廃棄した遺構と理解している。SX 1080の場合どのような状況が想定できるのか、以下SX 1080と儀式の場との関わりについて考えてみたい。

SX 1080が燈明皿の捨て場として選ばれた理由を考える上で多賀城南面に形成された方格地割りとその道路の交差点から発見されている土器埋設遺構の在り方は一つの手がかりを与えてくれる（註9）。現在のところ、南北大路の西側では南北道路9条（内、1条は推定）、東西道路7条が発見され、具体的な地割りの様子が明らかになってきている。道路の交差点からは土師器の甕や杯を使用した土器埋設遺構がかなりの確率で検出されており、道路に伴う祭祀の



第31図 城外の方格地割りと本調査区の位置

可能性が考えられている。それらと同様の土器埋設遺構は南北大路東側の地区でも高崎遺跡第6次・第7次調査においてそれぞれ1基発見されている。両調査では道路跡は発見されていないが、北1・南1道路がそのままの方向で南北大路の東側に延びると仮定すると、それらの土器埋設遺構はいずれもそれらの推定線上に位置していることが注目される。南北大路西側の地区における道路遺構と土器埋設遺構の在り方を考慮するならば、高崎遺跡における土器埋設遺構が道路に伴っていた可能性を全く否定することはできないであろう。消極的ではあるが、S X 1080が関わる儀式についても山王遺跡の例と同様に近くの道路上で執り行われた可能性を考えておきたい。

万燈会については、文献史料の中に「丙申。度一百人此夜於金鐘寺及朱雀路燃燈一万杯」、「天皇。太上天皇。皇后行幸金鐘寺。燃燈供養虛舍那佛。佛前後燈一万五千七百餘杯。」などいくつかの関連記事を見出すことができる。少なくとも古代に関してはすべてが中央において天皇あるいは政府が関与したものについての記事であるが、儀式を執り行った場所や使用した燈明皿の数量を示す資料として貴重である（註12）。近年、多賀城以外でも地方官衙遺跡や寺院跡の発掘調査によって多量の灯明皿が発見されたという報告がいくつかなされており、地方においても同様の儀式が執り行われていた可能性が高い。

付着物について

昭和46年出土資料を分析した高野芳宏氏は、土器の付着物については油煙の可能性を指摘しながらも「厚さが1mmを超える部分があることや、広い範囲に付着するなど灯明皿とするには不自然な点」もあるとして科学的な分析が必要であると論じている（註11）。今回、国立歴史民俗博物館の永嶋正泰氏に調査を依頼したところ、当初想定していたとおり油煙であるとの結論が得られた。詳細については付章に譲るとして、ここでは灯明皿使用形態について若干の考察を行う。

付着物には、部位と形状にバリエーションが認められ、それらを注目すると以下の4つのタイプに分類することができる。

I. 口縁部に灯芯の痕跡が残るもの

- a. 灯芯が1つ認められるもの（図版11-10）
- b. 灯芯が複数認められるもの（図版11-1・8・9）

II. 口縁部に灯芯の痕跡が確認できず、内面底部に付着物があるもの

- a. 付着物およびその痕跡が底部全体に認められるもの（図版11-5・7）
- b. 付着物の丸い痕跡が底部に複数認められるもの（図版2・3・4）

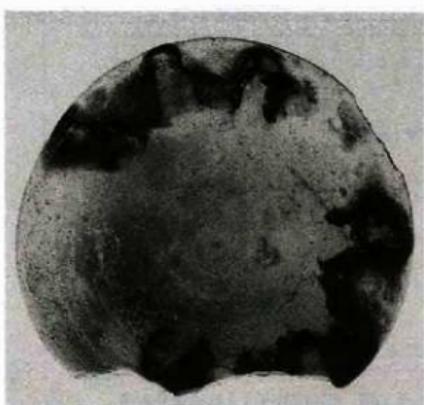
I類についてはおおよそ完形でないと判断できない場合がある。また複数の灯芯が一度に灯さ



1a



1b



2

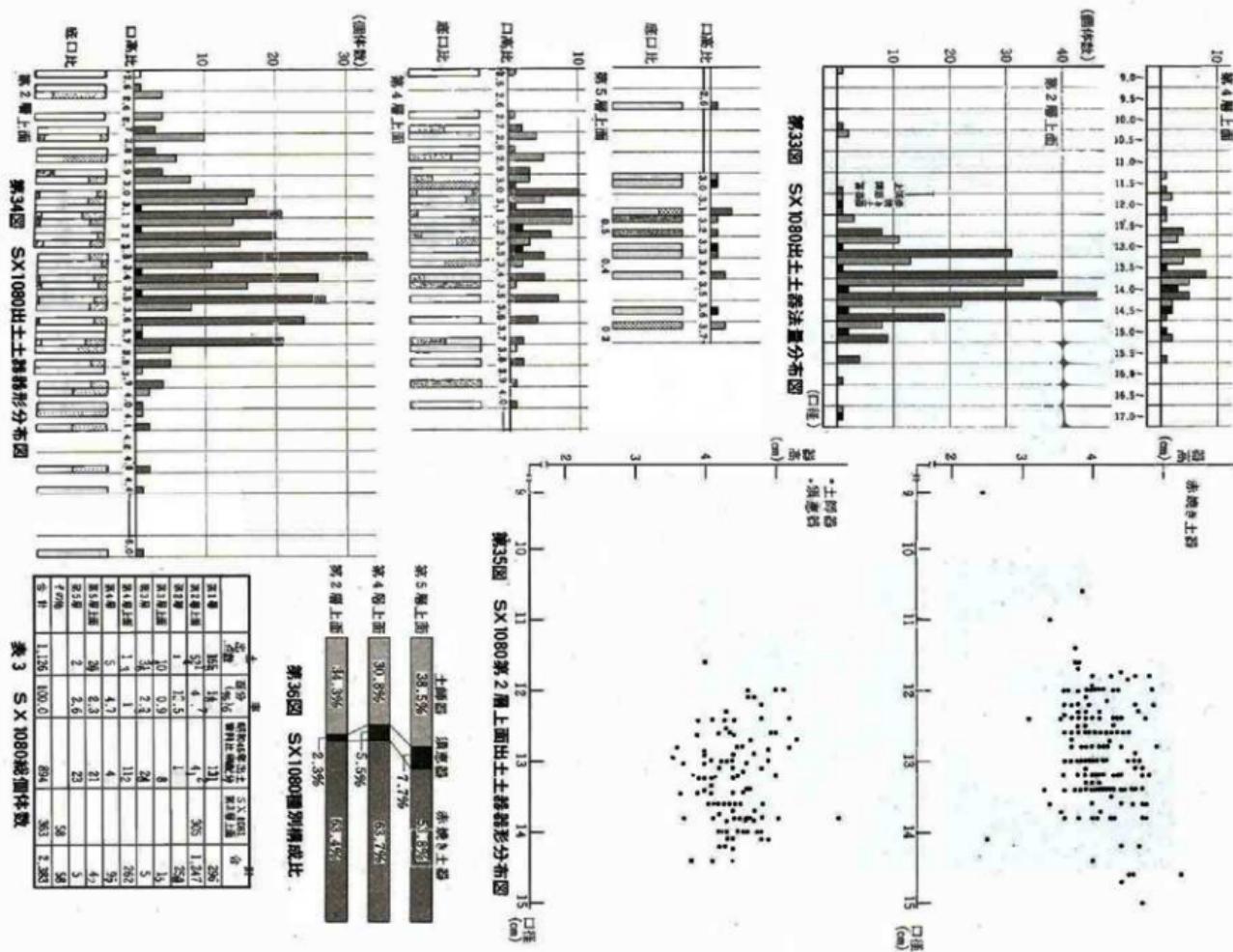
1. 炭化した灯芯
2. 複数の灯芯痕跡

第32図 山王遺跡第4次調査出土の灯明皿（参考）

れたのではなく、灯芯の位置をずらしながら使用した可能性も考えられるが、付着物の重なりから判断する限りすべて同時に灯っていたと見られる。Ⅱ類についてはaとbのいずれか判断できないものが多い。しかし、円形あるいは橢円形の痕跡が複数並んで認められるものが少なからず存在する。また底部の付着物がきれいに剝離し、体部下半部から口縁部にかけて薄くタール状の付着物が認められる例が多い。このような油煙痕跡のバリエーションは灯明皿としての使用形態、すなわち灯明の灯し方に起因していると考えられる。これら4つのタイプの他にもいくつかの形態が認められるが、使用形態を考慮せず器面に残された付着物の形状のみを対象とした分類はさほど意味を持つとは考えられない。

灯芯の原体については、SX 1080と同時期であり、しかも同様な性格と考えられている山王遺跡SK 161出土資料が参考になる。同資料は残存状態がきわめて良好であり、炭化してはいるものの灯芯の形状をよくとどめている（第32図1）。その剝離した部分と同様の痕跡はⅠ類の中に普遍的に見ることができ、中には繊維質の圧痕が観察できるものもある（図版11-1）。一方、Ⅱ類の痕跡からは紐状の灯芯は想定できず、繊維の塊をそのまま用いていたような印象を受けるものもある（図版11-4）。また、植物の繊維の束かと思われるものの圧痕が認められるものもあり、山王遺跡SK 161から良好な資料が出土している（図版11-11）。

永嶋氏の分析によれば、Ⅱa類のような在り方は、灯明皿にかなりの量の植物繊維を入れ、一時に大きな広がりのある灯火を灯した結果とされている。一方、Ⅰ類についても、山王遺跡



出土例（第32図1）でみると灯芯全体が炭化しており、基本的にはⅡa類と同様に大きな灯火を必要とした結果と考えられる。すなわち、Ⅰ・Ⅱ類とも、その先端のみに明かりを灯す一般的な灯明皿の在り方とは基本的に異なるものであり、灯明皿からあふれんばかりに燃え盛る灯火を必要とした特殊な使用形態とみなすことができる。

S X 1080出土土器について

S X 1080出土土器は、第5・4・2層上面とも基本的に平底の杯によって構成されている。おおよその特徴は、①土師器、須恵器、赤焼き土器によって構成されていること、②赤焼き土器には杯のみがみられ、小型杯が含まれていないこと（註13）、③土師器はロクロから糸切りで切り離された後、ヘラケズリ等の再調整がほとんど行われないものであるなどの点で多賀城跡出土土器の内のE群土器の内容と一致している（註14）。

なお、昭和46年の調査に係る正式な報告は『多賀城市史4 考古資料』を以て最初とするが、赤焼き土器杯とロクロ調整を施した土師器とが良好な伴出関係を示す例として既に桑原滋郎氏が紹介している（註15）。

以下、出土量が多い第4層上面と第2層上面出土資料を中心に分析を行う。

第4層上面出土資料 完形およびほぼ完形の土師器35点、須恵器6点、赤焼き土器58点、合計99点を対象とする。口径は土師器、赤焼き土器ともに11.5cmから16cm未溝のものがあり、13～14cmのものが多くみられる。口高比（口径／器高）についてみると、土師器は3.2を中心としてその前後のものが多く、赤焼き土器は3.0～3.6のものが多い。底口比（底径／口径）は0.4のものが圧倒的に多い。破片資料も含めた種別ごとの比率は、土師器30.8%、須恵器5.5%、赤焼き土器63.7%である。

第2層上面出土資料 完形およびほぼ完形の土師器108点、須恵器5点、赤焼き土器381点、合計494点を対象とする。口径についてみると、土師器は9.0～174cmのものがあり、14.0～14.4cmを中心としてその前後に集中している。赤焼き土器は10.0～16.4cmのものまであり、14.0～14.4cmを中心としてその前後に集中している。口高比（口径／器高）については、土師器は3.1～3.6に集中しており、赤焼き土器は3.3を中心として3.0～3.7に集中している。底口比（底径／口径）は0.4のものが圧倒的に多い。破片資料も含めた種別ごとの比率は、土師器34.3%、須恵器、赤焼き土器63.4%である。

土師器、須恵器、赤焼き土器の三者の比率についてみると、第4層上面と第2層上面出土資料とも、赤焼き土器が過半数を占め、土師器がそれにつぎ、須恵器はきわめて少ない。また、種別ごとの口径、口高比、底口比などの分布領域もほぼ一致しており、外形についてはおおむね近似した形態とみることができる。細部については、量的に安定している第2層上面出土資料でみると、体部から口縁部にかけての形態がa類：ほぼ直線的にのびているもの、b類：緩

やかに内湾しているもの、c類：緩やかに内湾して口縁部が外反するものなどが見られ、土師器はa類：21%、b類：68%、c類：11%、須恵器はa類：12%、b類：88%、c類：0%、赤焼土器はa類：22%、b類：63%、c類：15%である。第4層上面出土資料についても、ほぼ同様な傾向である。以上のことから、第4層上面と第2層上面出土資料については、層位的な上下関係はあるが型式的にはほぼ同一の土器群としてとらえることが可能である。第4層上面における一括廐棄と第2層上面における一括廐棄の間にどれほどの時間差を認めるべきかは明らかにできないが、比較的短い期間の内に相次いで行われた可能性も考えられよう。これらの土器の年代については、第4層上面の土器群が灰白色火山灰層に直接覆われ、第2層上面の土器群が降灰後のものであることから灰白色火山灰が大きな手がかりとなる。同火山灰の降下年代については、承平4（934）年に陸奥国分寺の七重塔が落雷によって焼失したという文献史料と、塔焼失に起因すると見られる焼土層が灰白色火山灰層を直接覆っていたという同寺跡の発掘調査の所見から10世紀前半とされており（註16）、降灰前後の土器群であるS X 1080第4層上面と第2層上面出土資料の年代もおおむね10世紀前半と考えることができる。また、それ以外の各層出土の土器についても型式的に同一であることから同様の年代と考えておきたい。

（3）石組暗渠とその関連構造

S D 1090石組暗渠およびその関連構造の発見は今回の調査成果の中で特筆すべきものの一つである。本構造の構築年代は、施設瓦として使用されていた平瓦（第9図4）が多賀城創建期（8世紀前半～中頃）のものであることからそれをさかのばらないことは明らかである。瓦という遺物の性格を考慮して第Ⅱ期（8世紀中頃～780年）ととらえるか、あるいは第Ⅰ期の内に含めて考えるべきか判断できなかった。廐棄年代も不明であるが、S D 1090の蓋とされていた須恵器蓋やS X 1092から出土した須恵器蓋はいずれも8世紀前半のものであることから、およそ8世紀の構造ととらえておきたい。古代の石組暗渠は、東北地方ではほとんど報告例がなく、多賀城の政庁（註17）や政庁南面道路（註18）などで発見されているのみである。SD 1090は全長わずか1.7mと小規模なものであり、城内のものと直接比較することはできないが、少なくとも一般集落ではほとんどみることのできないものである。また、注目すべきはその側石に使用している切り石である。このような硬質の石材を用いた切り石はきわめて類例の少ないものである。南北両側石の長さが同一でないことから、本来は別の目的で切り出されたものを転用した可能性もある。

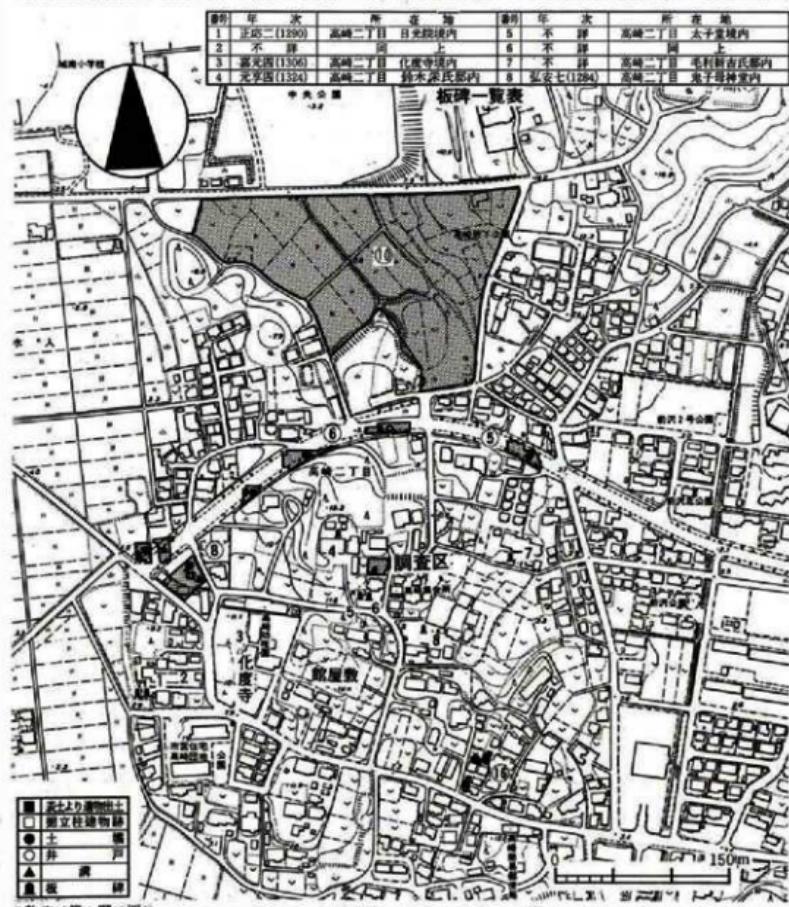
S D 1090石組暗渠は、S X 1094樹、S X 1092落ち込み（S D 1090溝）とともに谷に排水する一連の施設と捉えられるものであるが、如何なる施設からの排水を処理したものかは明らかにしがたい。現地形からの観察であるが、調査区のすぐ西側には東西、南北とも約40mの平坦地が見られ、その周囲も緩い斜面となっている。同時代の何らかの施設が存在し、S X 1092落ち

込み、SD 1091溝がそれに伴うものであつただろうことは想像にかたくない。斜面に整地地形を行って石組暗渠を敷設する一連の造成工事を見てもううい一般庶民にかかるものとは考えられない。性格は不明であるが格の高い公的な施設の存在を想定しておきたい。

2 中世以降

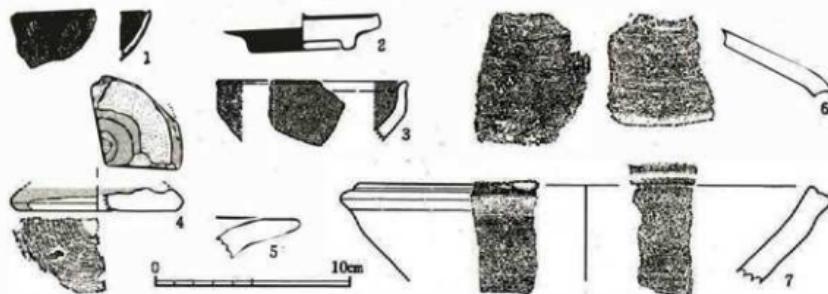
今回の調査では、中世以降の遺構として溝跡2条・土壙2基を検出した。ここでは中世の遺物が出土したSD 1086溝跡を中心に年代の検討を行い、性格等について考えてみたい。

SD 1086溝跡から出土した中世の遺物には、瓦質土器擂鉢、施釉陶器（志野）、漆器皿、下



第37図 調査区周辺地区の中世の遺構

駄がある。「V-2」で述べたように、本溝跡の1層は人為的に埋め戻された可能性が高く、2層が機能時の堆積層と考えている。2層から出土しているのは漆器皿と下駄である。中世の下駄については、そのものから直ちに年代を推定することはできないが、仙台市中田南遺跡で台板や差歎の形態が類似する露卯下駄が15世紀前半～16世紀に位置づけられる第78号溝跡から出土しており（註19）、S D 1086出土の下駄も同様の年代を推定しておきたい。次に第1層から出土した瓦質土器擂鉢についてみると、全国各地の中世の遺跡から出土しており、東北地方でも浪岡城や根城（青森県）など16世紀代の遺跡から良好な資料が出土している。しかし、各地の遺跡から出土した資料をみると、口縁部の形態や筋目の入れ方などに違いがあり、生産地や年代差を示している可能性がある。宮城県内では多賀城市の新田遺跡・山王遺跡・多賀城跡、仙台市の仙台城三ノ丸跡・今泉城跡・中田南遺跡・安久東遺跡・黒川郡大和町の下草古跡などから出土している。その内、新田遺跡では14世紀中頃以降に堆積した黒色土の上層と下層から中世の遺構が検出されており、瓦質土器擂鉢は15～16世紀の年代を与えている上層の遺構からのみ出土することを確認している。しかし、仙台城三ノ丸跡では「元和〇年」（1615～1623）銘をもつ木筒と共に伴した例（註20）もあり、利府町の大沢窯跡瓦捨場跡では慶安3年（1650）に瑞應寺の瓦とともに焼成された可能性があるとされている（註21）。このように瓦質土器擂鉢については、15世紀以降近世まで使用されたことが知られているが、年代を明らかにできる資料が乏しく、編年研究はいまだ行われていない。S D 1086出土資料は、仙台城三ノ丸跡や県内の他の遺跡から出土したものと口縁部の形態などが類似しており、17世紀中頃の大沢



番号	種類	施用	形	文	施	施	参考年号
1	青 磁 鉢	D区 S D 50 (B02)	(内)外面青磁面	外腹面有文 (色調) 鮫模様7. SCY 6/1	越後富源13-14世紀	TS - 6 R 79	
2	青 磁 鉢	D区 S D 117 (B13)	(内)外面青磁面	底付二輪脚 (色調) オリーブ灰色5 YR 5/1	越後富源 13世紀	TS - 6 R 212	
3	青 磁 茶碗	D2区-H 沈水田面	(内)外面抹茶 (外腹面下端削切)	色調 面有N 2/-薄緑10 YR 4/4	中国産	TS - 6 R 213	
4	陶器陶器盤	D区 S X 43 (B04)	陶器	底付 (底付) 削切切り (色調) オリーブ灰色10 YR 6/2	瀬戸窯	15世紀	TS - 6 R 60
5	陶器陶器盤	C2区 深口盤	(内)外面	ヨコナメ (色調) 底オリーブ色5 Y 3/2 斜斜か?	瀬戸窯	12-13世紀	TS - 6 R 204
6	陶器陶器盤	D区-H 深口盤	(内)外面	ヨコナメ (色調) 底青磁色10 YR 6/2			TS - 6 R 205
7	陶器陶器盤	C区 S X 92 (B01)	(内)外面	ヨコナメ (色調) 底青磁色10 YR 5/2 斜斜色5 YR 2/2 斜斜か?	瀬戸窯	13-14世紀	TS - 6 R 203

第3図 国立区周辺地区の中世の遺物

窓跡瓦捨場跡のものとは大きく異っている。したがって、ここではおおよそ15~17世紀前葉の年代を考えておきたい、施釉陶器の鉢（志野）については、体部の小破片であり、年代を決定することは難しいが、志野は生産地側の研究によると16世紀末以降に出現するとされているものである。

これらのことから、本溝跡の機能していた時期は15~16世紀頃であり、16世紀末以降に機能を失ったものと考えられる。

次にこの溝跡の性格について考えてみる。調査区から南へ約35mほど離れた地区に、東西約70m、南北約60mの平場が確認されている。その周辺一帯は現在でも「館屋敷(たてやしき)」と呼ばれており（註22）、詳細な調査はなされていないが、土壙や空堀・段築も確認できる。『留守家文書』の「斯波直持施行状」によると、延文元年（1356）にはすでに、宮城郡高崎村は、平安時代後期以来の豪族である八幡氏の所領となっていたことが明らかである（註23）。『平姓八幡氏系譜』には、八幡氏の一族の彦三郎盛忠が寛正6年（1496）4月に宮城郡高崎村に居住し、以来「高崎」の姓を名乗ったという記述や、天正6年（1579）に、高崎近江盛長が八幡氏の家督相続問題の際に功績をあげていることなどが記されている（註24）。また、盛忠の法号は「化度寺殿」であり、現在でも調査区の南西約120mのところに化度寺という寺院が存在している。こういった地名や文献の記載などから、館屋敷と呼ばれる一帯は高崎氏の館跡と推定されている（註25）。SD1086溝跡は、館屋敷と呼ばれている範囲には含まれないがそれと関連する施設の一部であった可能性が高い。また、16世紀末以降にSD1086溝跡が人為的に埋め戻されているという事実は、天正18年（1590）頃、高崎氏の宗家である八幡氏が、宮城郡の中心的な国人領主留守氏の利府城から黒川郡大谷城への移転に伴ってこの地を離れたことに關るものかもしれない（註26）。高崎遺跡では、今回の調査を含めて過去16回の発掘調査が実施されており、中世の掘立柱建物跡や溝跡、井戸などの遺構が検出されている（第37図）。出土遺物では、12~13世紀の中国産の白磁四耳壺や渥美窯産の甕（第38図5）、13~14世紀の中國龍泉窯系の青磁碗（1・2）、中国産と考えられる天目茶碗（3）、県内産と考えられる無釉陶器擂鉢（7）、15世紀の瀬戸・美濃窯産の灰釉花瓶（4）が出土している。また、中世の供養碑である板碑も多く確認されており（註27）、広く高崎地区一帯に中世の遺跡が展開していくと推定できる。しかし、まだその一端が明らかになったばかりであり、具体的な様子は今後の調査によって明らかにしていきたい。

註1 高野芳志「高崎遺跡 井戸戸（今村氏）地区の調査」多賀城市『多賀城市史4 考古資料』1991

註2 調査時には、第2次整地層はSD1090に伴うものと考え、第1次整地層との上下関係は工程差と理解していた。しかし、①それら二つの整地層にはさまれてSD1093が存在すること、②第2次整地層の範囲がSD1090よりさらに東側に広がり、排水口を完全にふさいでいるなどの理由から、

第2次整地層はS D 1090など一連の排水施設よりも新しい段階のものであると判断した。

- 註3 種類・器種・寸法を同じくする土器の口縁部残存率（残存する口縁周の長さ／復元した口縁全周の長さ）を合計してその個体数とするものである。杯瓶のように個性の少ない遺物を多量に計測する場合に有効であることからこの方法を探用した（京都大学埋蔵文化財研究センター「第4章 遺物の考察」「京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白河北殿北辺の調査—」1981、宇野隆夫「食器計量の意義と方法」「国立歴史民俗博物館研究報告第40集」国立歴史民俗博物館1992）。
- 註4 「一切經納禮帳」（天平13年＝741）に「又請親自在寺經」とあり「寺＝菩薩」の用例が見られる（国立歴史民俗博物館「正倉院文書拾遺」1992）。また、千葉県印旛郡印西町の天神台遺跡から「寺」と墨書きされた8世紀中葉の土器が出土している。報告書では「菩薩」と判読しており、近接する木下磨寺との関連を考えている（印旛郡都市文化財センター「千葉県印旛郡印西町 木下線延長（I期）工事に伴う埋蔵文化財調査 天神台・ヤジダ遺跡発掘調査報告書」1991）。
- 註5 奈良県立橿原考古学研究所『奈良・平安の貿易陶磁』
- 註6 註1と同じ
- 註7 昭和46年の調査を直接担当された宮城県教育庁文化財保護課長桑原滋郎氏（当時、宮城県多賀城跡調査研究所技師）よりご教示を得た。
- 註8 本書の作成に際し、宮城県多賀城跡調査研究所保管資料すべてにわたって口縁部残存率を計測した。調査及びデータの公開にあたって同研究所より高配を得た。
- 註9 千葉孝弥・青原弘樹「多賀城周辺遺跡の様相—山王遺跡・市川橋遺跡・高峰遺跡—」『第20回古代城柵官街遺跡検討会』1994。
- 註10 多賀城市教育委員会『高峰遺跡—都市計画街路高峰大代線外1線施設工事関連発掘調査報告書Ⅱ—』多賀城市文化財調査報告書第12集 1987。
- 註11 多賀城市埋蔵文化財調査センター『高峰遺跡—中央公園関連調査報告—』多賀城市文化財調査報告書第19集 1989。
- 註12 前者は『統日本紀』天平十六年（744）十二月八月条、後者は同天平十八年（746）十月六日条。
- 註13 第2層上面から1点小型の杯が出土しているが（第24図14）、底口比（底径／口径）が0.6と比較的大きく、器壁も厚いことから、10世紀前半頃の一般的な小型杯とは異なるものと理解している。
- 註14 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要』1980。
- 註15 同田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要』1974。
- 桑原滋郎「須恵器について」東北考古学会『東北考古学の諸問題』1976。
- なお、これらの中の須恵器と本書中の「赤焼き土器」は同じものである。
- 註16 註14と同じ。
- 註17 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政序跡 本文編』1984。
- 註18 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡—宮城県多賀城跡調査研究所年報 1983』1984。
- 註19 仙台市教育委員会『仙台市 中田南遺跡』仙台市文化財調査報告書第182集 1994。
- 註20 仙台市教育委員会『仙台城三ノ丸跡』仙台市文化財調査報告書第76集 1985。

- 註21 宮城県教育委員会・宮城県道路公社「V. 大沢墓跡」「現沢・大沢墓跡ほか」宮城県文化財調査報告書第116集 1987。
- 註22 安永3年(1774)に書かれた『宮城郡陸方高崎村風土記御用書出』の「屋敷名」の項に「鉢屋敷」が見られる(『多賀城市史5 歴史史料(二)』1985)。
- 註23 「後編 儒守氏史料」『水沢市史2 中世』水沢市史編纂委員会 1976。
- 註24 「平姓八幡氏系譜」『多賀城市史5 歴史史料(一)』1985。
- 註25 多賀町『多賀町町誌』1967。
- 註26 註23と同じ。
- 註27 和泉区附「三、多賀城市内の供養碑」多賀城市『多賀城市史4 考古資料』1991。

参考文献

- 古川 弘「江戸の出土下駄」『物質文化32』物質文化研究会 1979。
- 瀬戸市史編纂委員会『瀬戸市史・陶磁史編四』1993。
- 美濃古窯研究会『美濃の古窯』光琳社出版 1976。
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター「新田遺跡」多賀城市文化財調査報告書第23集 1992。
- 多賀城市教育委員会「山王遺跡」多賀城市文化財調査報告書第9集 1986。
- 仙台市教育委員会「今泉城跡」仙台市文化財調査報告書第58集 1983。
- 仙台市教育委員会「南小泉遺跡」仙台市文化財調査報告書第52集 1983。
- 埋蔵文化財発掘調査研究所・安久東遺跡調査団「宮城県仙台市安久東遺跡」
埋蔵文化財発掘調査研究所報告書第2集 1986。
- 宮城県教育委員会「下草古城跡」「下草古城跡ほか」宮城県文化財調査報告書第146集 1992。
- 宮城県教育委員会「下草古城跡」「下草古城跡ほか」宮城県文化財調査報告書第154集 1993。
- 宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡—宮城県多賀城跡調査研究所年報 1987」1988。

報告書抄録

ふりがな	たかさきいせき							
書名	高崎遺跡－第11次調査報告書－							
副書名								
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第37集							
編著者名	千葉孝弥・伊藤 浩・永嶋正春							
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	宮城県多賀城市中央2-27-1							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
所轄遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高崎遺跡	宮城県 多賀城市 高崎 2-26	18	018	38度 17分 33秒	140度 59分 53秒	19940411 ～ 19940613	176	宅地造成に係る確認調査及び事前調査
所轄遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
高崎遺跡	集落跡	奈良時代以前	竪穴住居 1軒	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、綠釉陶器、青磁(古代)、墨書き土器、施釉陶器、瓦質土器、下駄、漆器皿		土器捨て場は平安時代に多賀城内で執り行われた仏教儀式=万燈会に係るものと推定。		
		奈良時代	石組暗渠 1条 樹溝 1基 土壤 5条 2基					
		平安時代	竪穴住居 2軒 土器捨て場 2ヵ所 土壤 1基					
		室町時代	溝 1条					



図版 1

上：調査区航空写真

(平成5年撮影)

下：同 上

(昭和36年撮影)

この空中写真是、建設省
国土地理院が撮影したもの
を、建設省国土地理院の承
認を得て掲載したものであ
る。

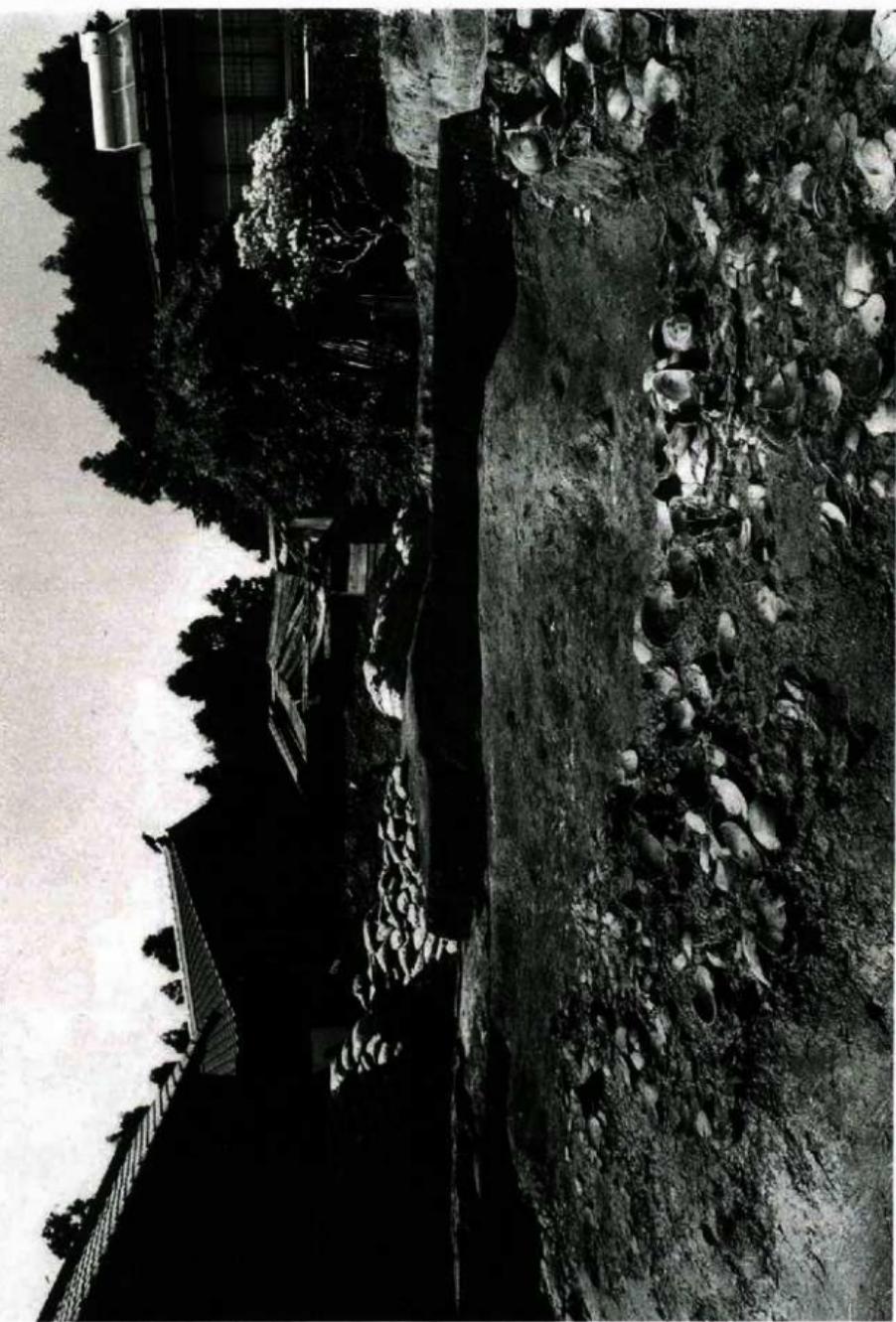


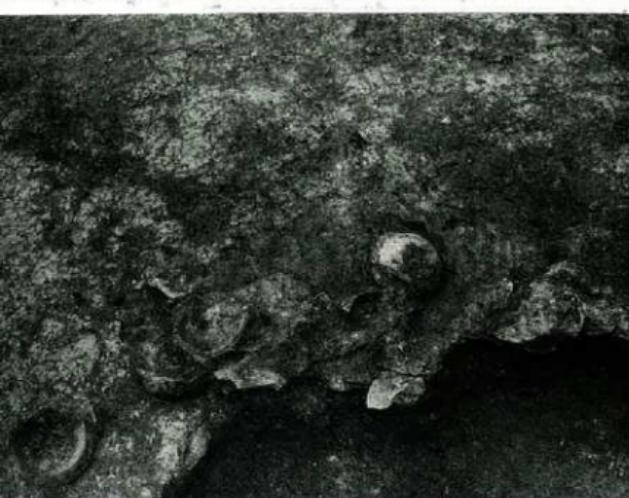


図版 2

- 上：調査区遠景（南より）
中：SX1080, SX1081
SD1086 (西より)
下：SX1080 第2層上面
土器出土状況（東より）

図版 3 S X1080 第2層上面土器出土状況（南より）



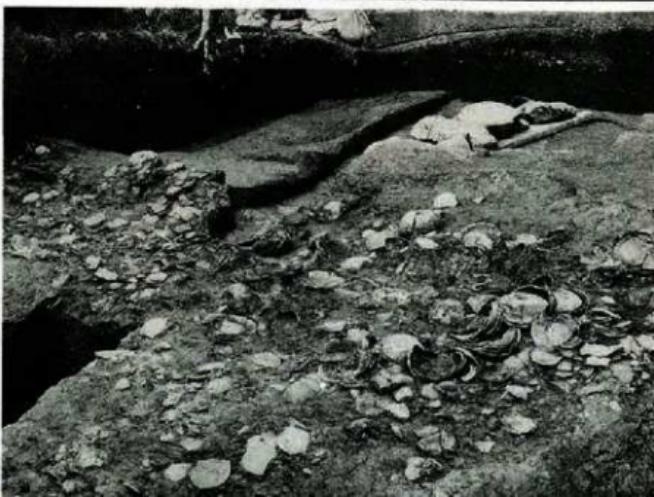


図版 4

上：S X1080 第4層上面
土器出土状況（南より）

中：同 上 灰白色火山灰
下の出土状況（東より）

下：S X1080 土層断面
(西より)



図版 5

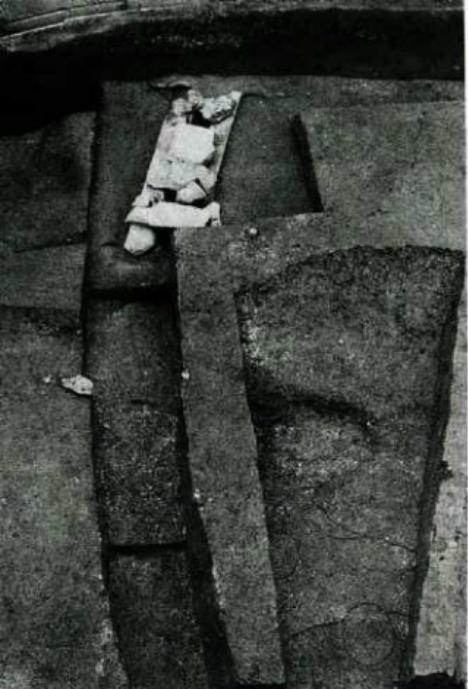
上(左・右): SX1080

第2層上面土器出土状況

中: SX1081 第3層上面土器

出土状況(東より)

下: 同 上



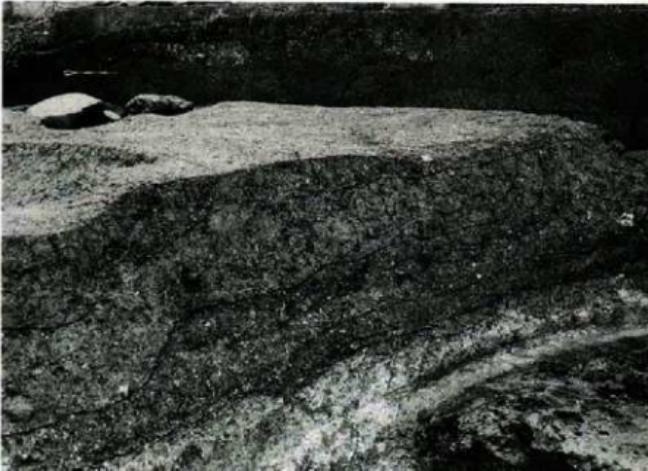
図版 6

上左：SD1090 検出状況（東より）

上右：同 上（西より）

下左：同 上 西端部（北より）

下右：同 上（西より）

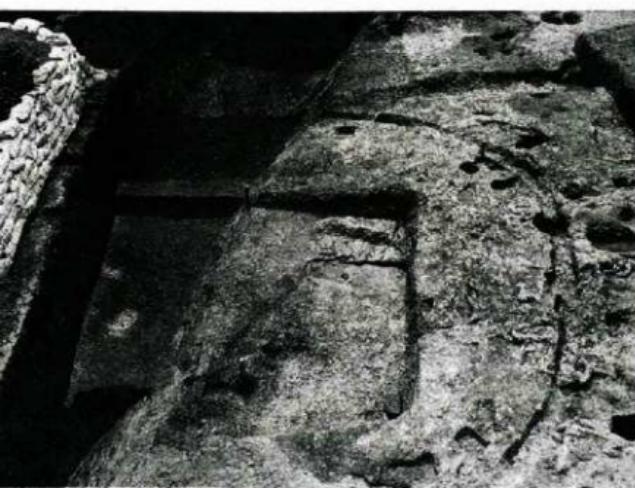


図版 7

上：SD1090 西端部
(西より)

中：SD1090・第2次整地層
(南東より)

下：第2次整地層・SI1079
(北東より)

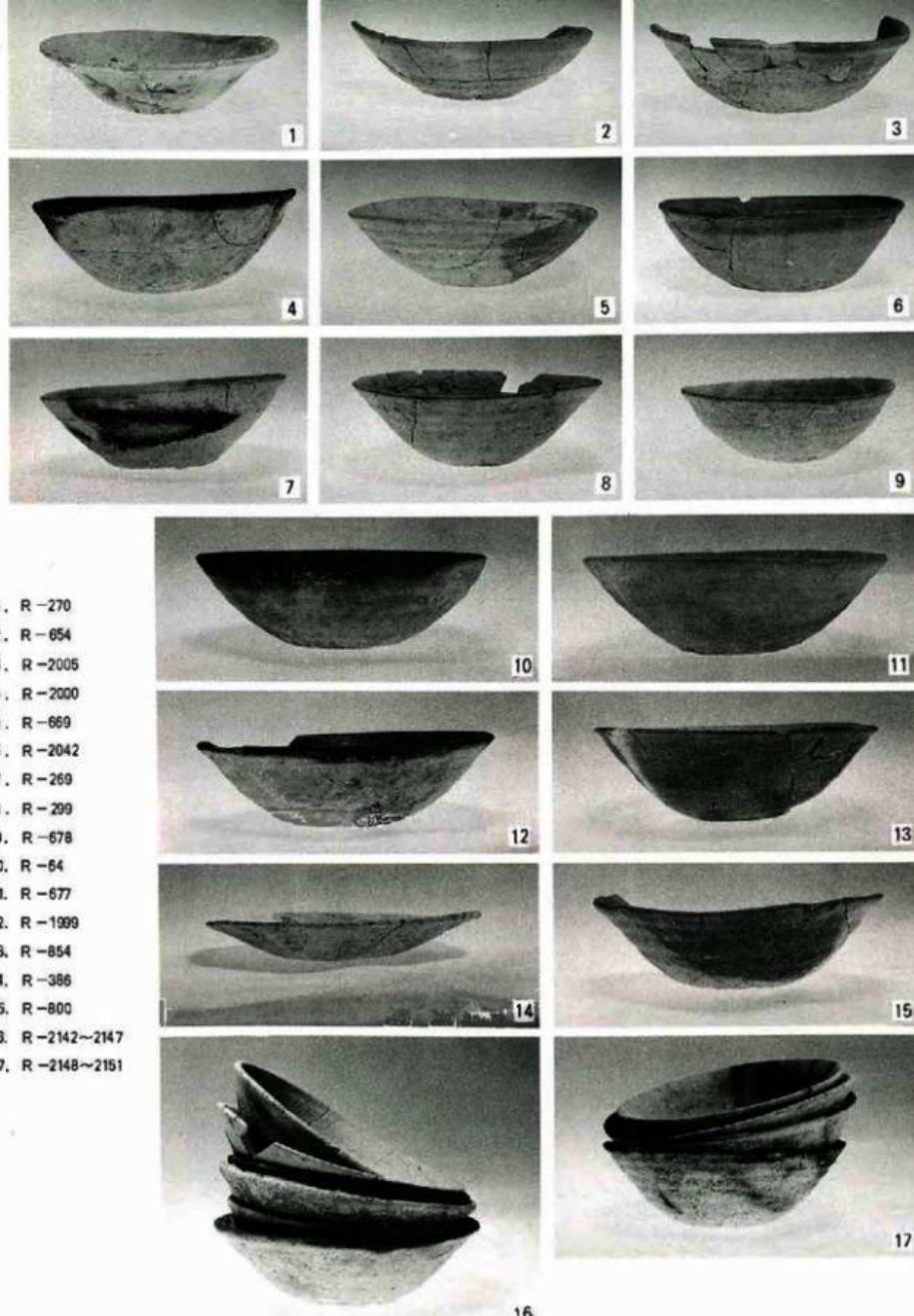


図版 8

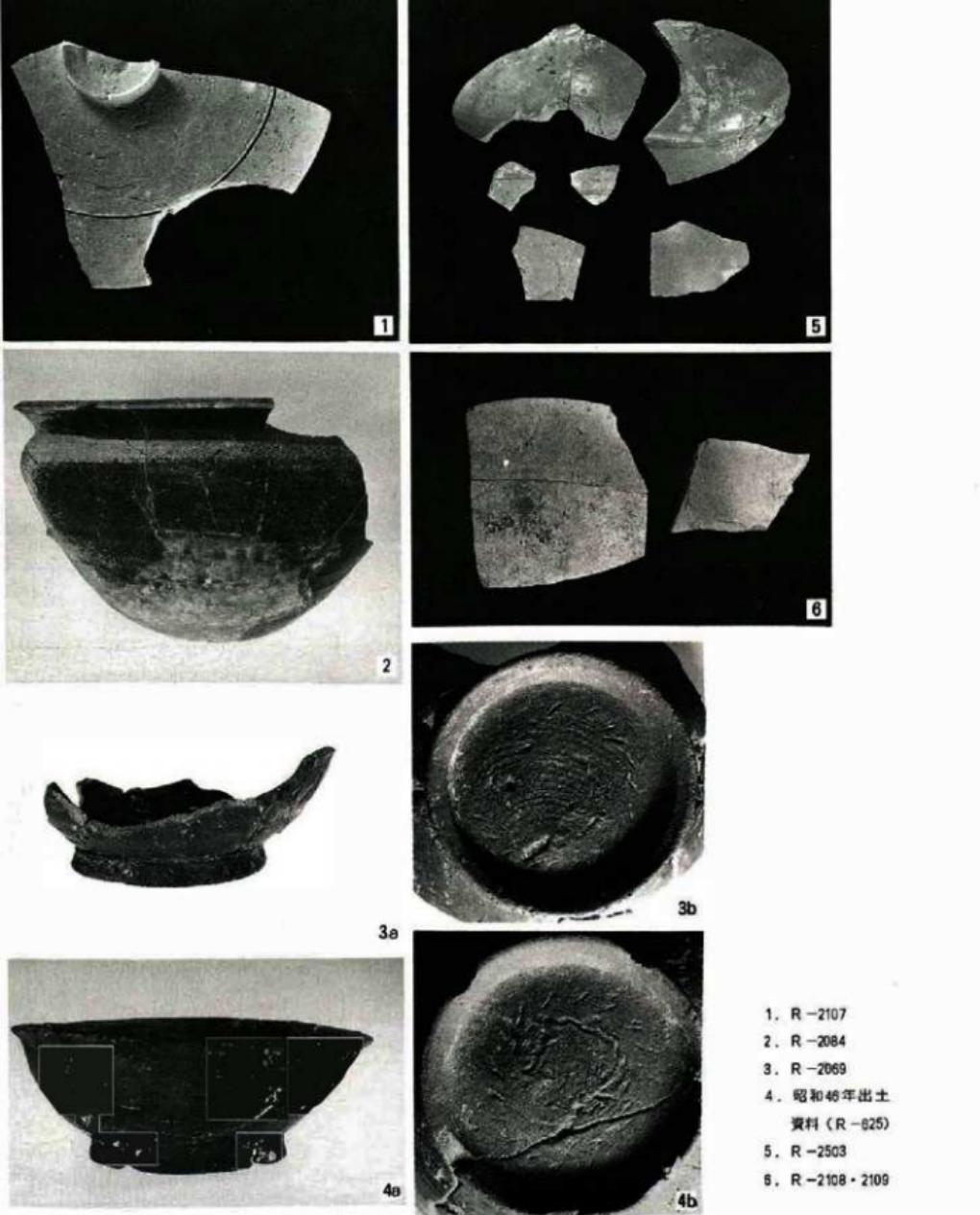
上：S I 1077（南より）

中：同 上（東より）

下：S I 1075（西より）

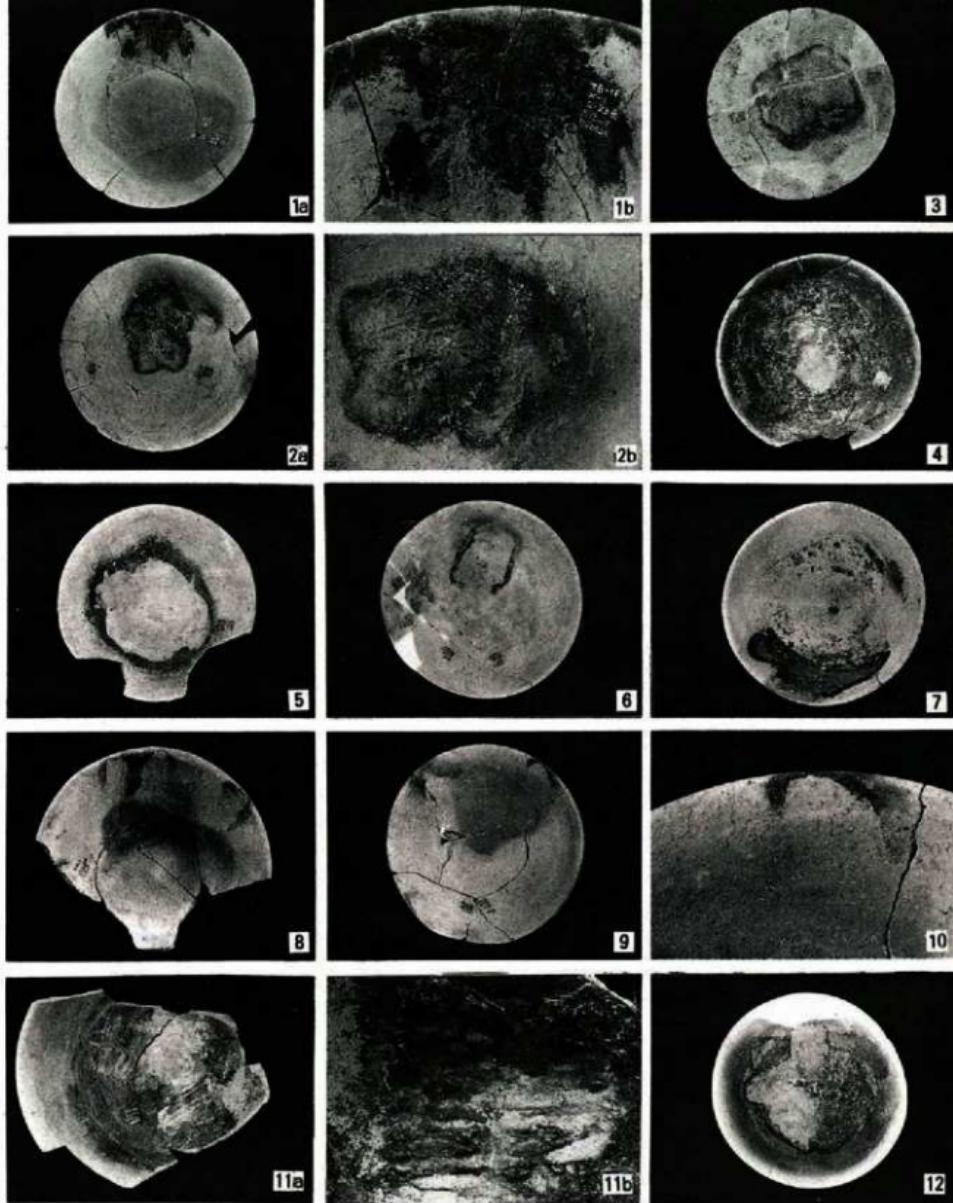


図版 9 出土遺物 (1) 古代の土器



1. R-2107
2. R-2084
3. R-2069
4. 昭和46年出土
資料 (R-825)
5. R-2503
6. R-2108・2109

図版 10 出土遺物 (2) 古代の土器・陶磁器



1. R-301

2. R-574

3. R-386

4. R-2124

5. R-261

6. R-561

7. R-268

8. R-242

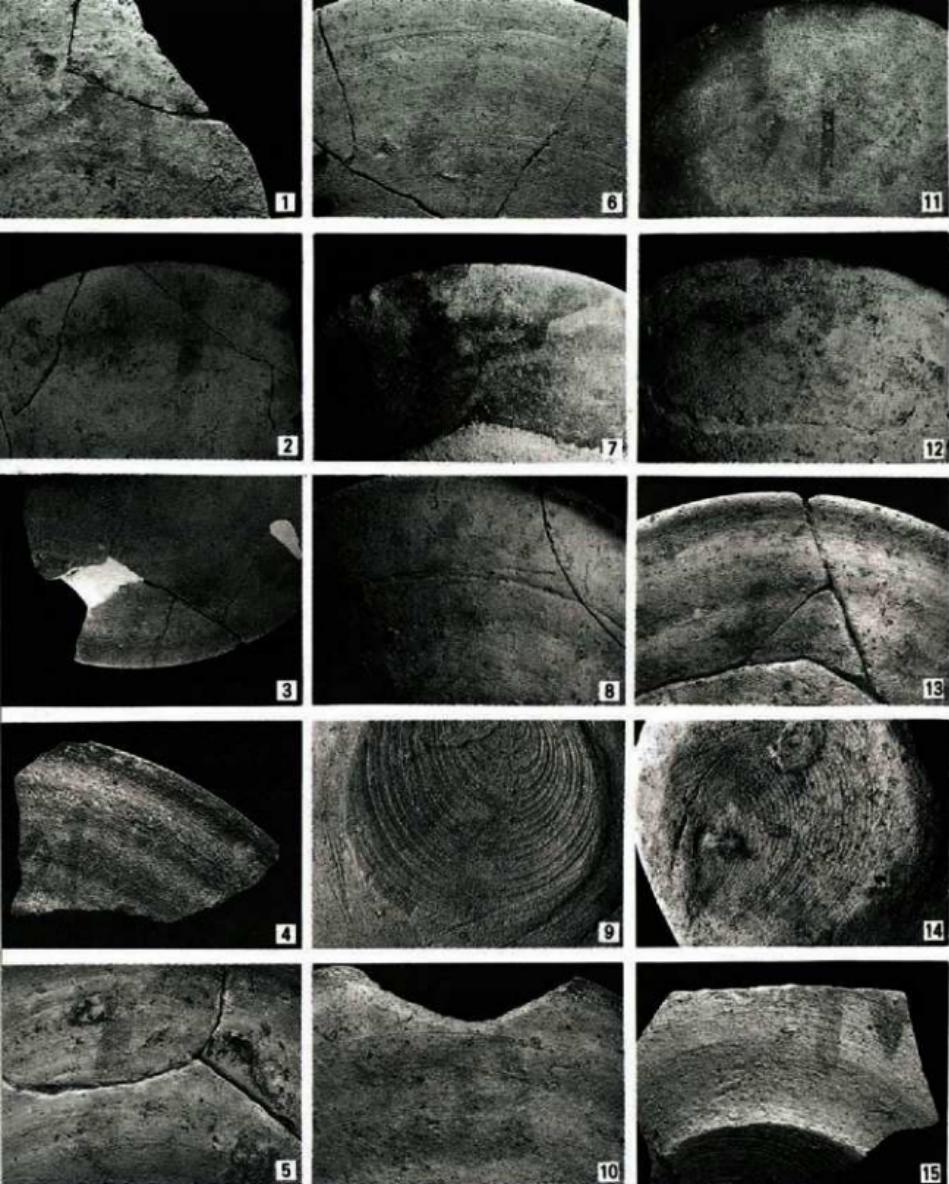
9. R-560

10. R-239

11. S N - 4 (R-592)

12. S N - 4 (R-358)

図版 11 出土遺物（3） 灯明皿の使用痕跡



1. 第22回2
2. 第23回2
3. 第23回4
4. SX1081第2層 (R-2053)
5. 第22回5

6. SX1081第3層上面 (R-2044)
7. 第25回13
8. 第22回7
9. SX1081第3層上面 (R-2043)
10. SX1080第5層上面 (R-1343)

11. 第22回3
12. 第22回1
13. 第25回12
14. SX1080第4層上面 (R-2007)
15. SX1080第2層上面 (R-2014)

図版 12 出土遺物 (4) 墨書き器

出土物（5）

中世の陶磁器
・木製品

1. 施釉陶器底・皿

R - 2119	R - 2117
R - 2120	R - 2118

2. 無釉陶器底

R - 2121 R - 2123

3. 瓦質土器擂鉢

R - 2082

4. 瓦質土器擂鉢

R - 2080 R - 2081

5. 下駄

R - 3

6. 下駄

R - 4

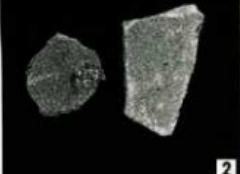
7. 漆器皿

R - 5

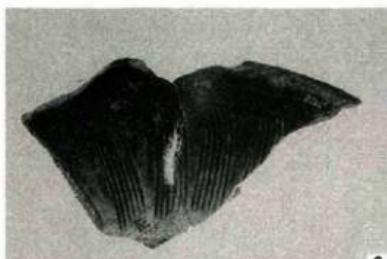
R - 2117
 R - 2118
 R - 2119
 (第1層)
 R - 2080
 R - 2081
 R - 2120
 R - 2082
 R - 3
 4 + 5



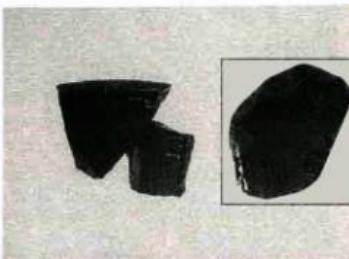
1



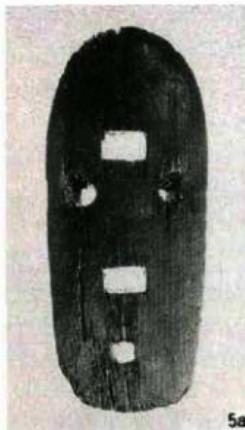
2



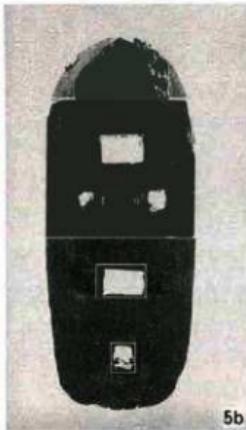
3



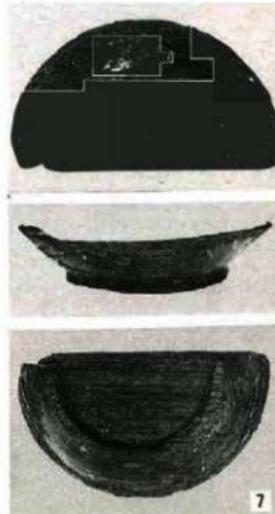
4



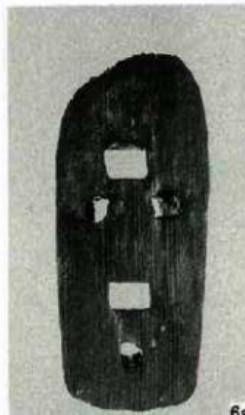
5a



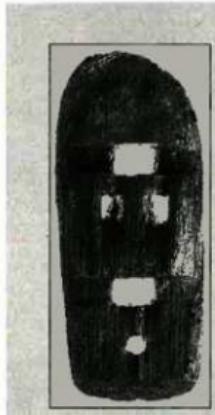
5b



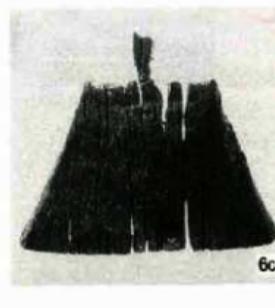
7



6a



6b



6c

付章 図版



図1 No236 土器内底部 残渣物の状況 1×



図2 No236 土器口縁部外面 黒色付着物 1×



図3 No236 土器外面黒色付着物の層断面 200×



図4 No236 土器内面残渣物の層断面 200×

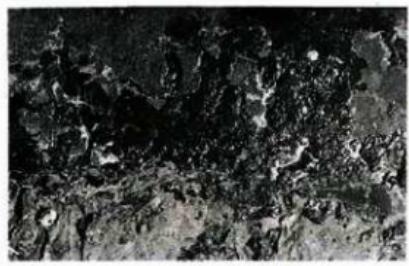


図5 No11 土器内面 付着物の状況 2×

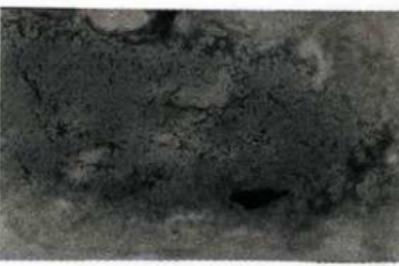


図6 No11 土器内面付着物の層断面 500×



図7 山王遺跡C2タイプ 内面残渣物 1×

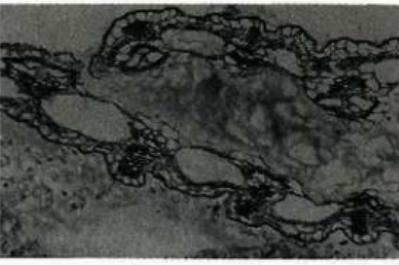


図8 同左 残渣物の層断面 100×

付章、高崎遺跡出土燈明皿内の残存物について

国立歴史民俗博物館 永嶋 正春

はじめに

発掘担当者によれば、標記の遺跡では大量の土器（皿）が一括廃棄された状態で出土している。油煙らしきものの付着状況から見て、これらの土器は万燈会に使用されたものと想定できるという。それらの土器は10世紀初めから前半にかけてのものであり、少なくとも3回の廃棄があったと考えられるところから、1回当たり500点以上の土器が使用されたとみることもできるという。

筆者は、これらの土器が燈明皿であることを念のため確認する意味と、燈心の素材と在り方とを検討する目的で調査を行った。ここではそれらの結果を報告すると共に、併せて若干の考察を試みた。

調査結果

土器No236

内面には、底部を中心としてかなり厚みのある残渣物が認められた（図1）。それらの表面は黒色～褐色を呈し、また断文が目立つもので、粘性に欠けた脆い状態にある。中心部に器表が露出しているのは、恐らくこの部分にあった残渣物が剥離脱落した結果であろう。口縁部の外面には、通常の燈明皿によく見られるような、油様の垂れ痕と思われる厚みのあまり無い黒色物が付着している（図2）。

これらの実体をよりはっきりと把握するため、内面の付着残渣物と外面の黒色付着物とを微小に採取し、光学顕微鏡による観察を実施した。すなわち、試料をポリエチレン樹脂に埋包固定した後、切断研磨し、最終的には薄片試料化して検鏡したのである。

外面の黒色付着物の層断面を図3に示した。この図によれば、付着物は厚い所で30ミクロン（0.03mm）を越えているが單層であり、その性状は、通常の燈明皿の場合の燈心部痕跡周囲に見られる熱変質した油層のそれに一致している。すなわち、層の下半部（器表面直上）は、淡褐色～褐色を呈する透明層であり、これは熱による変質があまり進んでいない油おそらく植物油と見て間違はない。この上部を覆う濃褐色～黒色の部分は、熱による変質がより一層進んでいることを示しており、その厚さが13ミクロン前後とほぼ均等であるのに加え、その表面にはクラックの発生が認められる。

内面の厚みのある残渣物の層断面（図4）を見ると、やや疎らに存在する植物性繊維の間をおそらく油と思われる淡褐色物が埋めており、それらから当時の燈明皿としての使用実態を推

測することができよう。これら植物繊維の断面は、全体としてはその長径が10ミクロン弱から15ミクロン前後の長円形を示しており、どちらかといえば、1年生草本類の韌皮繊維と思われる様相を呈している。糸や紐あるいは布に見られるような繊維断面の規則的な分布は存在しない所から繊維を解したなりで使用したものであろう。厚みのある残渣物は、皿の内底部に広く付着しており、また口縁部内面には燈心の頗著な痕跡が認められないことからすれば、この燈明皿は、その内部にかなりの量の植物繊維を入れ、油を浸すことにより一時に大きな広がりのある燈火をともすものとして機能していたものと考えたい。

土器No11

現状では厚手の残渣物は認められず、内底部の周縁に赤褐色～黒色の薄膜状付着物を残すのみである（図5）。この付着膜を採取して、前述の手法で薄片化したものを図6に示すが、やはりその性状からは油と判断される。前出の外面部付着物ほどには熱変質が進んでいないのは土器内面に油滲りとして在って、それほどの熱を受けなかった経緯を反映しているのである。なお、口縁部内面には燈心の痕跡は見あたらず、加えて現状の付着膜の底部寄りの端部が頗著なしづで終わっていることを考えると、前出の燈明皿と同じように、当初は内底部を中心に広がりのある燈心材が用いられており、面的に広がりのある燈火をともしていたと推定され、現況はその残渣物が剝離し逸失したものと理解したい。

おわりに

以上に報告した2例については、発掘担当者が推察された通り燈明皿であり、しかも燈心が1本とか3本とかいうものでは無く、一時に大火をともす様な使用状況にあったと理解できる。その大量投棄をも考えれば、万燈会としてのすさまじいまでの燈火をイメージすることもできる。

同様な燈明皿は、山王遺跡の出土遺物のなかにも検出でき、それらのなかでは図7に示したように、燈心を極めて規則的に結束して使用したものと認められる。この例では、その燈心素材は、図8のように一部に表皮様のものも残す大変多孔質な草本性植物である。筆者の調査は未だ不十分であるので、“イ”すなわち燈心草の種が使用されているとの即断は避けたいが、その可能性は大いに有り得るので、今後は高崎遺跡のみならず、山王遺跡についても更に丁寧に十分な調査をすべきであると考えている。

参考文献

『燈用植物』（ものと人間の文化史50） 深津 正（財）法政大学出版局 1983

キャプション

図 1	No236 土器内底部 残渣物の状況	1×
図 2	No236 土器口縁部外面 黒色付着物	1×
図 3	No236 土器外面黒色付着物の層断面	200×
図 4	No236 土器内面残渣物の層断面	200×
図 5	No11 土器内面 付着物の状況	2×
図 6	No11 土器内面付着物の層断面	500×
図 7	山王遺跡C:タイプ 内面残渣物	1×
図 8	同左 残渣物の層断面	100×

多賀城市文化財調査報告書第37集

高崎遺跡

－第11次調査報告書－

平成7年3月31日 発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話 (022) 368-1141

印刷 伊藤印刷
多賀城市下馬五丁目1番7号
電話 (022) 362-0805
